



TITLE:

李義山七律集釋稿(一)

AUTHOR(S):

李商隱研究班

CITATION:

李商隱研究班. 李義山七律集釋稿(一). 東方學報 1981, 53: 611-671

ISSUE DATE:

1981-03-14

URL:

<https://doi.org/10.14989/66596>

RIGHT:

李義山七律集釋稿(一)

李商隱研究班

* 七律のうち無題詩七首を載せ、七律以外の無題詩三首を附載する。

* 唐詩百名家全集本李商隱詩集を底本とし、とりあげまたは引用する義山の詩には底本の排列による作品番號を記入する。李義山詩各本篇目對照表(本學報五〇冊) 参照。

* 義山の文の引用は樊南文集詳註および樊南文集補編により、「文集」および「補編」と略稱する。

* 文獻(7)の唐詩(藝文版書名「全唐詩稿本」)は、絶句が萬首唐人絶句、絶句以外の詩體が(5)の叢刊本と同系のテキスト、を底本としている。

* 舊注を踏まえる場合も概ね注者は明示しない。舊注諸本の詩釋については、釋者の名をあげ原則として全文を載せる。

* 朱鶴齡本の「補注」は文獻(10)の順治刊本各卷末に附されるもの。何焯および紀昀の項の「評本」は(11)の沈厚煥輯評本を指す。

* 主要文獻一覽

一 無注本

(1) 李商隱詩集三卷 唐詩百名家全集本

李義山七律集釋稿(一)

二 舊注諸本

(2) 李商隱詩集三卷 影印錢謙益寫校本

(3) 李義山集三卷 唐人八家詩本(毛本)

(4) 全唐詩(三卷)

(5) 唐李義山詩集六卷 四部叢刊本

(6) 唐音統籤(十卷)

(7) 唐詩(十一卷) 藝文印書館影印本(稿本)

(8) 李商隱詩集十卷補遺一卷 高麗刊本(懷德堂文庫藏)

(9) 玉溪生詩箋三卷 錢龍惕撰(靜嘉堂文庫藏)

(10) 李義山詩集三卷 朱鶴齡箋注 順治十七年序刊本(内閣文庫藏)

藏)

(11) 李義山詩集三卷 朱鶴齡箋注 沈厚煥輯評

(12) 西崑發微三卷 吳喬撰

(13) 義門讀書記李義山詩二卷 何焯撰

(14) 李義山詩疏二卷 徐德泓・陸鳴皋撰(徐陸合解)(懷德堂文庫藏)

(15) 李義山詩集十六卷 姚培謙箋

(16) 玉溪生詩意八卷 屈復撰

(17) 重訂李義山詩集箋注三卷集外詩箋注一卷 朱鶴齡原本 程夢

星刪補

(18) 玉溪生詩說二卷 紀昀撰

(19) 玉谿生詩詳註三卷 馮浩撰

(20) 玉谿生年譜會箋四卷・李義山詩辨正不分卷 張采田撰

(21) 李義山詩偶評三卷 黃侃撰

三 唐詩選本注釋

(22) 唐詩鼓吹十卷 元好問輯 郝天挺注 廖文炳解 王清臣・陸

貽典參解

(23) 唐詩實珠六十卷 胡以梅撰

四 近代注釋

(24) 李義山詩講義 森槐南

(25) 李義山の無題詩 鈴木虎雄 (中國文學報六冊)

(26) 李商隱 高橋和巳 (中國詩人選集一五)

(27) The Poetry of Li Shang-yin 劉若愚

(28) 李商隱詩選 安徽師範大學中文系古代文學教研組

(29) 李商隱詩選 陳永正

* 掲載詩篇

昨夜星辰 III 六一四頁

聞道閨門 II2 (七絶) 六二二頁

來是空言 II4 六二六頁

颯颯東南 II5 六三二頁

含情春晚晚 II6 (五律) 六三九頁

何處哀箏 II7 (七古) 六四二頁

相見時難 150 六四六頁

鳳尾香羅 366 六五二頁

重帷深下 367 六五八頁

萬里風波 570 六六四頁

無題二首之一 III

昨夜星辰昨夜風

畫樓西畔桂堂東

身無彩鳳雙飛翼

4 心有靈犀一點通

隔座送鉤春酒暖

分曹射覆蠟燈紅

嗟余聽鼓應官去

8 走馬蘭臺類斷蓬

昨夜の星辰 昨夜の風

畫樓の西畔 桂堂の東

身に彩鳳雙飛の翼無けれど

心に靈犀一點の通ずる有り

座を隔てて鉤を送れば 春酒暖かに

曹を分ちて射覆すれば 蠟燈紅なり

嗟余鼓を聴き 官に應じて去り

馬を蘭臺に走らせ 斷蓬に類す

校

2 樓 瀛奎律髓七「堂」 錢寫本「堂(?)」を「樓」に改む。

稿本旁注「堂」 毛本・朱鶴齡本・全唐詩校注「一作堂」

3 彩 朱鶴齡本・全唐詩・高麗本・唐詩鼓吹七「綵」 錢寫本

「彩」を「綵」に改め更に「彩」に改む。

5 鈞 高麗本・瀛奎律髓・唐詩鼓吹「闕」

7 余 叢刊本・稿本「餘」 高麗本・唐詩鼓吹「予」

鼓 百名家集本のみ「故」他の諸本に従って改む。

應 馮浩本校注「一作因。誤。」

8 斷 叢刊本・唐音統籤・高麗本・瀛奎律髓・唐詩鼓吹・唐詩類

苑一三八「轉」 毛本・朱鶴齡本「轉」^{一作斷} 稿本「轉」

に「斷」と旁注す。 全唐詩校注「一作轉」

韻

上平一東（風・東・通・紅・蓬）韻目は廣韻による。以下同じ。

*

1 昨夜星辰 〔趙嘏上令狐相公詩〕昨夜星辰回劍履。前年風月滿

江湖（七律の5・6句）。唐詩紀事四二令狐楚の條に見ゆ。なお

全唐詩項斯卷にも載せる。〔玉臺新詠七蕭紀和湘東王夜夢應令詩〕

昨夜夢君歸。賤妾下鳴機。〔庾信詠畫屏風詩二十四首之三〕昨夜

鳥聲春。驚聞動四鄰。今朝梅樹下。定有詠花人。昨夜の語、義山

の詩題に二見。〔昨夜335〕〔令狐舍人說昨夜西掖翫月因戲贈4〕

昨夜風 〔王昌齡春宮曲〕昨夜風開露井桃。未央前殿月輪高。

2 畫樓 〔李嶠晚秋喜雨詩〕聚靄龍仙閣。連雲繞畫樓。〔王維過

崔駙馬山池詩〕畫樓吹笛妓。金梳酒家胡。〔蝓蝶雞鸞鸞鳳等成篇

81〕畫樓多有主。鸞鳳各雙雙。〔藥轉92〕鬱金堂北畫樓東。換骨

李義山七律集釋稿（一）

神方上藥通。

西畔 〔文選三四枚乘七發〕蕩取南山。背擊北岸。覆虧丘陵。

平夷西畔。〔劉禹錫題集賢閣詩〕鳳池西畔圖書府。玉樹玲瓏景氣

閑。

桂堂 〔三輔黃圖四池沼〕甘泉宮南有昆明池。池中有靈波殿。

皆以桂爲殿柱。風來自香。〔玉臺新詠九歌辭二首之二〕盧家蘭室

桂爲梁。中有鬱金蘇合香。〔許渾贈柳環馮陶二校書詩〕桂堂同日

盛。芸閣同年榮。

3 彩鳳 〔謝朓永明樂府十首之十〕綵鳳鳴朝陽。玄鶴舞清商。

〔李白寓言三首之二〕搖裔雙綵鳳。婉孌三青鳥。ここでは、とぼり

の模様か、かんざしの形であろう。（2）〔薛道衡昔昔鹽樂府〕盤龍

隨鏡應。綵鳳逐帷低。〔趙嘏昔昔鹽二十首（以薛道衡詩每句爲題）

之十二彩鳳逐帷低〕巧繡雙飛鳳。朝朝伴下帷。（a）〔元稹會真詩〕

寶釵行彩鳳。羅帳掩丹虹。

雙飛翼 〔杜甫哀江頭詩〕飄身向天仰射雲。一箭正墜雙飛翼。

〔古詩十九首之十二〕思爲雙飛鸞。銜泥巢君屋。〔文選二三阮籍

詠懷十七首之四〕願爲雙飛鳥。比翼共翱翔。

4 靈犀 〔漢書九六下西域傳贊〕自是之後。明珠文甲。通犀翠羽

之珍。盈於後宮。（如淳曰……通犀。中央色白。通兩頭）〔文選五

左思吳都賦〕駭雞之珍。（李善注 孝經援神契曰。神靈滋液。則

犀駭雞。宋衷曰。角有光。鷄見而駭驚也）〔抱朴子內篇一七登涉〕

得眞通天犀角。三寸以上。刻以爲魚。而銜之以入水。水常爲人開

方三尺。可得采息水中。又通天犀角有一赤（孫星衍校注 事類賦引無一字。赤作白）理如縵。有自本徹末。以角盛米。置羣雞中。雞欲啄之。未至數寸。即驚却退。故南人或名通天犀爲駭雞犀。……此犀獸在深山中。晦冥之夕。其光正赫然如炬火也。（大觀本草一七引陳藏器本草）通天者。腦上角千歲者。長且銳。白星微端。能出氣通天。則能通神。可破水駭雞。故謂之通天。なお通天犀のことは西陽雜俎一六廣動植物毛篇にも見える。その犀角で作られた腰帶もしくはかんざしを身につけている者がいたのであろう。

(ハ)〔白居易寄獻北都裴令公詩〕通天白犀帶。照地紫麟袍。〔李德裕通犀帶賦〕客有以通犀帶示予者。嘉其珍物。古人未有詞賦。因抒此作。……匠者以其靈可禦邪。光能遠燭。……析以爲帶。加之盛服。〔補編三爲榮陽公謝集賢章相公狀〕花犀腰帶一條。右伏蒙仁恩。俯寵行邁。駭雞等貴。畫隼增輝。なお王墳にも通犀賦あり（全唐文八二九）。(カ)〔士燮卒章〕吉日嘉辰。誕聖生副。奉通天簪二枚。珠千八百貫。（北堂書鈔三一）〔段成式戲贈高侍御詩七首之六〕不獨邯鄲新嫁女。四枝鬟上插通犀。韓偓的用例もかんざしを指すか。（八月六日作四首之四）威鳳鬼應遮矢射。靈犀天與隔埃塵。

一點 〔李白寄遠詩十二首之六〕遙將一點淚。遠寄如花人。

〔戴叔倫想思曲〕落紅亂逐東流水。一點芳心爲君死。

5 隔座 〔吳志四八孫皓傳甘露元年注〕吳錄曰。（紀）陟字子上。

……孫休時。父亮爲尙書令。而陟爲中書令。每朝會。詔以屏風隔

其座。（蒙求）亮隔隔坐。（李翰原注 宣城記曰。隔以雲母屏風）〔楊汝士宴楊僕射新昌里第詩〕隔坐應須賜御屏。盡將仙翰入高冥。〔太平廣記二五一馮衮條引抒情詩〕唐馮衮牧蘇州。……更因飲酣。戲酒妓。而軍倅留情。索然無緒。馮昉之曰。老夫過戲。無能爲也。倅歛衽而謝。因吟曰。醉眼從伊百度斜。是他家屬是他家。低聲向道人知也。隔坐剛拋豆蔻花。（舊唐書一六八馮定傳 會昌六年。改工部尙書而卒。……子衮顯軒輊四人。皆進士登第。咸通中。歷任臺省）〔碧城三首之一五〕星沈海底當窓見。雨過河源隔座看。

送鈎 六朝以來の習俗に藏鈎がある。二組に分れて對座し、金のゆびぬきを握る人物の拳を互いにあてあう。もとは女子供のやることだったが、義山のころは大の男も含めての正月の遊びとなっていた。送鈎はそのゆびぬき即ち鈎を廻して行くことか。（周處風土記）義陽膺日飲祭之後。叟嫗兒童爲藏鈎之戲。分爲二曹。以效勝負。若人偶即敵對。人奇即人爲遊附。或屬上曹。或屬下曹。名爲飛鳥。以齊二曹人數。一鈎藏在數手中。曹人當射知所在。一藏爲一籌。三籌爲一都。（藝文類聚七四）〔又〕進清醇以告蠟。竭敬恭於明祀。乃有行彊。注云。彊蓋婦人所作金環以鎔指而縫者也。膺月祭祀後。優嫗兒童。各隨其儕。爲藏彊之戲。分二曹以效勝負。以酒食具。如人偶即敵對。人奇者即使奇人爲遊附。或屬上曹。或屬下曹。名爲飛鳥。以齊二曹人數。一彊藏在數十手中。曹父當射知所在。一藏爲籌。五籌爲一都。提者捕得。推手出彊。五籌盡最後失爲負。都主部便起。拜謝勝曹。（玉燭寶典一二）〔西陽雜俎六

藝奇〕舊記載驅令人生離。或言占語有徵也。舉人高映善意驅。成式嘗於荊州藏鉤。每曹五十餘人。十中其九。同曹鉤亦知其處。當時疑有他術。訪之映。言但意舉止辭色。若察囚視盜也。山人石旻尤妙打驅。與張又新兄弟善。暇夜會客。因試其意驅。注之必中。張遂實鉤於巾篋中。旻曰。盡張空拳。左有頃眼。鉤在張君幞頭左翅中。其妙如此。〔又續集四貶誤〕舊言藏鉤起於鉤弋。蓋依辛氏三秦記云。漢武鉤弋夫人手拳。時人效之。目爲藏鉤也。……又今爲此戲。必於正月。據風土記在臈祭後也。庾闡藏鉤賦序云。予以臈後命中外。以行鉤爲戲矣。〔李白宮中行樂詞八首之六〕更憐花月夜。宮女笑藏鉤。〔岑參燉煌太守後庭歌〕醉坐藏鉤紅燭前。不知鉤在若箇邊。〔馮浩注〕隔座送鉤者。送之使藏。今人酒令。尙有遺意。

春酒

〔詩豳風七月〕十月穫稻。爲此春酒。以介眉壽。〔傳

春酒。凍醪也。疏 春酒凍醪者。……此酒凍時釀之。故稱凍醪〕

こは詩經の原義と異なるだろうが、そうした用例は庾信あたりからか。〔奉和趙王春日詩〕莫畏無春酒。須花但見隨。〔山齋詩〕遙想山中店。懸知春酒濃。

6 分曹

〔楚辭招魂〕崑蔽象棊。有六博些。分曹並進〔王逸注曹。偶也〕適相迫些。〔王逸注 適猶迫也。言分曹列耦。並進伎巧。投箸行棊。轉相適迫。使不得擇行也。或曰。分曹並進者。謂並用射禮進之〕〔李白梁園吟〕連呼五白行六博。分曹賭酒酣池輝。

射覆

〔漢書六五東方朔傳〕上嘗使諸數家射覆。〔師古曰。數

家。術數之家也。於覆器之下而置諸物。令闇射之。故云射覆〕置守宮孟下。射之。皆不能中。朔……對曰。臣以爲龍又無角。謂之爲蛇又有足。跂跂脈脈善緣壁。是非守宮即蜥蜴。上曰。善。賜帛十四。唐末でも一般的に行われていた習俗であることが北夢瑣言の逸文により間接的に推測しうる。〔太平廣記二八九于世尊條引北夢瑣言〕遂州巡屬村民。姓于號世尊者。與一女。皆逆知人之吉凶。……節度許公存。以其妖妄。召至府衙。俾其射覆。不中。乃械而殺之。一無神變。また玉壺清話七に、北宋の太宗の時の射覆の名人丁文果の記事が見えている。

蠟燈紅

〔杜甫陪章留後侍御宴南樓詩〕出號江城黑。題詩蠟炬

紅。〔范堅蠟燈賦〕爾乃旋閑房。升玉榻。列華檠。鏤凝蠟。浮柱頽其始燃。祕闥於是乃闌。旁映文楹。仰暉丹栢。赫如燭龍吐輝。

爛若翳陽復旭。〔類聚八〇〕

7

〔爲有149〕無端嫁得金龜婿。辜負香衾事早朝。〔鏡檻301〕豈能

拋斷夢。聽鼓事朝珂。

嗟余

〔文選二一・玉臺新詠四顏延之秋胡詩〕嗟余怨行役。三

陟窮晨暮。〔李善注 毛詩〔魏風陟岵〕曰。嗟予子行役。夙夜無已〕嚴駕越風寒。解鞍犯霜露。……悲哉遊官子。勞此山川路。

聽鼓

〔何遜宿南洲浦詩〕沉沉夜看流。淵淵朝聽鼓。〔大唐六

典八門下省〕城門郎。掌京城皇城官殿諸門開闔之節。……候其晨昏擊鼓之節。而啓閉之。〔原注 承天門。擊曉鼓。聽擊鐘後一刻。鼓聲絕。皇城門開。第一鑿鑿聲絕。宮城門及左右延明乾化門開。

第二鑿鑿聲絕。官殿門開

應官

〔吳喬注〕南唐李建勳出鎮臨川九江帥。周宗移文索器物。建勳乘醉批答之云。偶罷阿衡來此郡。固無閑物可應官。可知應官是唐人口語也。〔韓翃舍人即事82〕通內藏珠府。應官解玉坊。〔馮浩注引徐逢源曰。應官猶云當官。是唐人口語〕

8 〔偶成轉韻七十二句贈四同舍562〕公〔盧弘正〕事武皇爲鐵冠。

歷應請我所難。我時憔悴在書閣。臥枕芸香春夜闌。明年〔大中元年〕赴辟下昭桂。東郊慟哭辭兄弟。

蘭臺

〔大唐六典一〇祕書省〕祕書監〔原注 龍朔二年。改爲蘭臺。其監爲蘭臺太史。咸亨元年復舊〕〔又〕正字四人。正九品下。〔原注 掌詳定典籍。正其文字。前代才學之士。多以佞官兼其任者〕〔通典二六祕書監〕祕書校書郎……大唐置八人。掌校典籍。爲文士起家之良選。○祕書正字……隋置四人。大唐因之。掌刊正文字。其官資輕重。與校書郎同。

斷蓬

〔王之渙九日送別詩〕今日暫同芳菊酒。明朝應作斷蓬飛。〔許渾夜行次東關逢魏扶東歸詩〕南北斷蓬飄。長亭酒一瓢。

* *

朱鶴齡

8 杜氏通典。御史大夫所居之署。謂之憲臺。後漢以來。亦謂之蘭臺寺。按。義山釋褐祕書省校書郎。王茂元辟爲掌書記得侍御史。故此用蘭臺事。

〔補注〕馮班曰。義山以畿赤高資。失意蹉跎。出而從事諸侯幕府。

此詩託辭諷懷。以序其意。身無綵鳳一聯。言同人之相隔也。下二聯。序宴會之歡而已不得與。方走馬從事遠方以爲慨也。楊孟載

〔基〕云。義山無題詩。皆寓言君臣遇合。得其旨矣。〔楊基〕眉菴集〕卷九「無題和唐李義山商隱詩序」參照

吳喬

2 述〔令狐〕綯宴接之地。

3・4 言綯與己。位地隔絕。不得同升。而已兩心相照也。

5・6 極言情禮之歡洽。

8 結唯自恨。未怨令狐也。

何焯

〔讀書記〕定翁〔馮班〕云。起句妙。馮己蒼〔舒〕先生云。妙在首二句。次連襯貼流麗圓美。西崑一世所效。義山高處不在此。

〔評本「圓美」の二字なし。〕「效」を「學」に作る。讀書記はこの一條のみ

〔評本〕〔中晚唐詩〕叩彈集〔七〕云。義山無題。楊孟載謂皆寓言君臣遇合。朱長孺亦言不得但以艷語目之。吳修齡又專指令狐綯說。似爲近之。

0 定翁云。起句妙。三四不過可望不可即之意。點化工麗如此。次句。言確有定處也。○義山無題諸作。眞有美人香草之遺。正當以不解解之。

1・2 嘈彼小星。三五在東。自比身處卑位。不得遂其好也。

1 牧翁注。星有好風。

4 言止於相望。

太玄（經四）迎。次四。男子目珠。婦人嗟鉤。貞。注謂遠嫌。

陸鳴皋

此因羈宦而思樂境。亦不得志之詩也。首二句。言良辰而在勝地。乃倒裝法。次聯。言身不得至而心至之。腰聯。正想慕歡宴之場。而方從事一官。不能與會。故嗟耳。李初爲祕書省校書郎。後又辟幕府而得侍御史。故用蘭臺事。而曰斷蓬者。喻去來頓折也。

徐德泓

此詩非咏夜景。然既以夜說入。則酒暖燈紅聽鼓字樣。俱屬夜間。律法始合。一起超忽。尤爭上乘處也。

姚培謙

此言得路與失路者之不同也。星辰得路。重以好風。畫樓桂堂。正得意人集聚之地。此時雖不必傳翼而飛。已心許作一路上人矣。於是隔座送鉤。分曹射覆。眉眼傳情。機關默會。留髡送客之樂。真言可知。而余以聽鼓應官之身。雖從走馬蘭臺之後。巧拙冷煖。真有咫尺千里之歎也如何。本集此章後有絕句112云（正文略）意其人必少俊而驟騰清華者歟。

屈復

一二。昨夜所會時地。三四。身雖似遠。心已相通。五六。承三四言藏鉤送酒。其如隔座。分曹射覆。惟得燭紅。及天明而去。應官送馬。無異轉蓬。感目成于此夜。恐後會之難期。

程夢星

星按。義山無題諸作。世多以豔語目之。不知義山豔語。轉皆有題。

凡無題者。皆寄託也。楊孟載能知其爲寓言。是矣。但皆以爲感歎君臣之遇合。未免郭郭。須分別觀之。各有所爲。乃得耳。此詩第一首有蘭臺字。當是初成進士。釋褐祕書省校書郎。調補弘農尉時作。蓋歎不得立朝。將爲下吏也。起用星辰字用風字。非泛泛寫景。自漢有郎官上應列宿之語。後代多以入朝爲郎者爲上星辰。劉賓客送人出郎署云。夜見星辰憶舊官。崔珏傷義山詩。亦有成紀星郎之言。風則莊子所謂吹萬不同之物。而失意者有如義山禪師之對李輅所言黑風吹墮者也。此詩之起意。謂昨始得爲校書郎。方有列宿之榮。無端而出於外。乃如風吹飄落也。次句畫樓桂堂。比祕書省之華貴。以足上文之意。三四。言身今不得復至。而心未能忘情。五六。言時賢之在祕書省者。風流情事。當有送鉤射覆。酒暖燈紅之樂。結二語。謂已不能與此樂事。以作尉而去。迴思校書郎。能無繫戀。故明摭其慨歎。曰嗟予。曰應官。曰蘭臺斷蓬。詞旨皆豁然也。（七八字略。六二五頁參照）朱長孺引馮定遠之論。以爲義山畿亦高資。失意蹉跎。出而從事諸侯幕府。故託詞諷懷。以序其意。其說亦粗得其梗概。但未就詩中蘭臺字應官字細加推詳。則誤認爲應辟幕僚得侍御史之時。而不知爲初出祕書。調弘農尉之時也。

紀昀

〔詩說下〕何以不取無題二首也。曰。此二首直是狹斜之詩。了無可取。

問何以定二首爲實有本事也。曰。第一首七八句斷之。

〔評本〕二首皆狹邪之作。無所寓意。深解者失之。

馮浩

次聯。言身不接而心能通。五六。正想像得之。與下章112偷看相應。非義山身在其中也。意味乃佳。

趙臣瑗山滿樓唐詩七律箋注曰。此義山在王茂元家。竊窺其閨人而爲之。或云在令狐相公家者。非也。觀次首絕句。固自寫供招矣。

又何疑焉。浩曰。自來解無題諸詩者。或謂其皆屬寓言。或謂其盡賦本事。各有偏見。互持莫決。余細讀全集。乃知實有寄託者多。直作豔情者少。夾雜不分。令人迷亂耳。此二篇定屬豔情。因窺見後房姬妾而作。得毋其中有吳人耶。趙箋大意良是。他人苦將上首穿鑿。不知下首明道破矣。鼓吹合諸無題詩。而計數編之。全失本來意味。可大噉也。

8 此云走馬蘭臺。必爲祕書郎時也。……舊解謂義山此時得侍御史。誤甚。

張采田

〔會箋〕此初官正字。歆羨內省之寓言也。首句點其時其地。身無二句。分隔情通。隔座二句。狀內省諸公。聯翩並進。得意情態。結則艷妬之意。恐已不能身廁其間。喜極故反言之也。

〔辨正〕此二首。疑在王茂元家觀其家妓而作。後篇112已說明矣。隔座二句。點明家妓。蓋因親串。故晦其題耳。

黃侃

案。義山無題詩。十九皆爲寄意之作。既云無題。則當時必有深隱

之意不能直陳者。此在讀者以意逆志。會心處正不在遠也。必概目爲豔語。其失則拘。一一求其時地。其失則鑿。此詩全爲追憶之辭。又有聽鼓應官之語。其出爲縣尉。追想京華遊宴之作乎。

廖文炳

此追憶昨夜之景而思其地。謂身不能至而心則可通也。送闌射覆。乃昨夜之事。嗟予聽鼓而去。跡似轉蓬。不惟不能相親。并與畫樓桂堂相遠矣。

胡以梅

義山無題借題諸篇。說者謂其托美人以喻君子。思遇合之所由作也。……如此詩下半首。語氣顯著。且若作遇合論。席間座主。已是靈犀通照。何尚煩轉蓬之歎乎。此章本集內二首。其二112曰。……則席上本有萼綠華其人。於吳王苑中偷看之而感情耳。已有注脚。……此詩是席上有遇。追憶之作。妙在欲言良宵佳會。獨從星辰說起。是言星辰晴煥。昨夜爲良夜。而風亦和風也。疊言昨夜。是追思不置。如鳳吟鳳吟。潮平潮平。腹轉車輪耳。畫樓西畔而曰桂堂。蓋用盧家蘭室桂爲梁之堂。畫樓爲陪襯。桂堂爲實位。兩句凌空步虛。有繪風之妙。只一桂字。如春艸之勾萌。而東字作爲下落。測其微旨。西字亦是陪客。東字本於恨不早嫁東家王之東。然爲桂堂穿線。則隱然有一人影在內。不須道破。令人猜想自得。然猶在幽暗之中。得三四鋪雲襯月。頓覺七寶放光。透出上文。身遠心通。儼然相對一堂之中。五之勝情。六之勝境。皆爲佳人着色。且隔座分曹。申明三之意。送鉤春燧。方見四之實。蠟燈紅後。恨

無主人燭滅留髡之會。聞鼓而起。今朝寂寞。能不重念昨夜之爲良時乎。若欲謂之傷遇合而作。則起處何因。首二句旨在何處。便入暗室。五六亦覺膚淺泛語。嚼蠟無味矣。應各出手眼。不能習人唾餘也。……射覆。即探鉤。……按唐龍朔(缺泐二字)。改祕書省爲蘭臺。時義山爲祕書省校書郎也。朱箋引御史。恐非。

近代注釋

〔森〕中卷七四頁。〔鈴木〕六四頁。〔高橋〕四七頁。〔劉〕八六頁。〔安徽師大〕六四頁。〔陳〕三三頁。

* * *

まず舊説を概括すれば、A遇合説、B艷情説に大別されるが、徐德泓・屈復は何れとも判斷できない。

A₁對象特定(令狐綯) 吳喬

A₂對象不特定 朱鶴齡・何焯・陸鳴皋・姚培謙・程夢星・張采田

(會箋)・安徽師大

B₁對象特定(王茂元家妓) 馮浩・張采田(辨正)・森

B₂對象不特定 紀昀・黃侃・廖文炳・胡以梅・鈴木・高橋・劉・

陳

B₃不詳 方回(律髓風懷類)・胡震亨(統籤情詞類) なお胡震亨

は萬里風波570をのぞく七律六首を情詞類に編入、また唐詩類

苑も570以外の無題十五首を閨情類に編入する。

一般的に近代諸注釋では、無題の詩を純然たる艷情の作と見なす傾きにあるが、それは鈴木において最も徹底している。しかし、

無題諸作を一つ一つ、着實かつ虚心に検討してみると、結局鈴木説により信憑性を認めざるをえぬのだ。無題の詩ひいては義山の艷詩全般を、常に性急にかれの生の傳記資料に還元しようとする傳統的注釋にただ盲從し、果して義山詩のころをつかみうるかどうか。いわんや注釋家たちの固定觀念たる正史描く所の義山像の正確さの保證など無なるにおいておや。

1 昨夜の星辰昨夜の風は、極めて清新なイメージと感ぜられる。

胡以梅なども妙句たることにすでに氣づいており、昨夜昨夜の疊みかけに深い感情がこめられると解釋しているのだが、ここには何か祕密めかしたもののいい、ただあなただけへの私からのひそかな語りかけがあるのではないか。趙嘏の詩と比べれば、單に紙の上のことはでなく、現實に生きたことばとしての性格を持つことが明らかである。何當共翦西窓燭の西窓も同じではないだろうか(李義山七絶集釋稿(一)(本學報五一冊)五七七頁)。兩者ともに女性に關係した詩なのが特徴的だ。

2 畫樓——きらびやかな樓閣の西のほとり、そして桂の香木で作られた堂屋の東、こここそ(あなたを)見そめた、或いは東の間の眼福を楽しんだ場所だ。畫樓も桂堂も貴人の大邸宅を暗示するかのようである。2句もあるいは1句同様の性格を持つかもしれないけれども、それほどに成功した表現ではないように見える。

3 仲よく並んで飛ぶ色どり鮮やかな二羽の鳳のような翼は、残念ながらわが身にはない。彩鳳は座の調度品あるいは相手の装身具

からの連想か。

4 しかし、心の中には確かに一脈相通するものがあるのだ。あの靈犀の角に神祕な通天の力を持つ白い線が一本通じているように。靈犀もやはり装身具からの連想であろう。

5 あちら側とこちら側に對座し、さて鉤を手から手へと送り、どの手にあるかとあて合いながら、春正月の季節の酒に身も心もふんわり暖められてくる。隔座はある距離を置いて坐ること、劉若愚説のように隣同士くっついて坐る意味ではない。

6 兩軍に分れて隠された品物の名のあてくらべをやるそばには蠟燭の焰が眞紅に燃え上る。以上の四句は唐代の貴人の館の宴席の絢爛豪華、湧き立つような雰圍氣が活寫され、作者もその末席に連っていた、と解すべきで、馮浩説は當らない。

7・8 ああ、私は曉の觸れ太鼓を聞いてしまったからには、勤務に着くため行かねばならない。馬を祕書省に走らせるわが身はたとえてみれば風に弄ばれる根なし草なのだ。

何らかの寓意が詩に寄託されていると主張する場合、その作品がアレゴリーであることを裏づける物的證據——それは作品内にあってもよいし、例えば離騷。また外部にあってもよいが、例えば詩題・自注等——が一つでもないかぎり、客觀的妥當性はまず得られない。最も熱烈な義山詩寓言寄託論者たる張采田が前後全く矛盾する説を出すことによって、はしくも自らの強い主觀性を露呈させる結果となった。この詩は、(1)作詩狀況がある程度明

示され、(2)作品中に主人公（即ち作者ならん）が一人稱で現われるなど、他の無題の詩がそれらの條件を全く缺くのはかたちを異にし、その意味ではむしろ特殊である。それでも、字義通りに解釋するならば、前記B₂、對象特定不能の艶情の作、以上のことは決していえまい。

本連作の係年は、(1)馮浩の開成四年（八三九）、(2)張采田の會昌二年（八四二）、(3)安徽師大の會昌六年（八四六）、三説ある。義山が蘭臺すなわち祕書省在職中に正月を迎えたのは、會昌六年および翌大中元年の二年だけと考えられるから、安徽師大の新説がより當を得ている。

（荒井 健）

無題二首之二 112 《附載》

聞道閨門萼綠華 聞くならく閨門の萼綠華
2 昔年相望抵天涯 昔年相望み 天涯に抵る
豈知一夜秦樓客 豈知らんや一夜 秦樓の客
4 偷看吳王苑內花 偷み看る吳王苑內の花

校

2 抵 毛本「尙抵」 朱鶴齡本・全唐詩校注「一作尙」 高麗本「尙」 稿本旁注「尙」
4 看 毛本「著一作看」
苑內 高麗本「內苑」

韻

上平十三佳(涯)

下平九麻(華・花)

李義山の今體詩では、上平十三佳韻を韻字に用いる合計七例は、いづれも下平九麻韻の字に混え用いられている。佳麻兩韻の音の近さに由る通用と思われる。

*

1 聞道 [玉臺新詠六徐悵答唐孃七夕所穿針詩] 雖言未相識。聞道出良家。

閨門 [離騷] 吾令帝閨開關兮。倚閨闔而望予。(王逸注 閨闔。天門也) [說文二上] 閨 閨闔。天門也。从門昌聲。楚人名門。皆曰閨闔。[吳越春秋四閨閨內傳] (元年) 立閨門者。以象天門。通閨闔風也。立蛇門者。以象地戶也。閨闔欲西破楚。楚在西北。故立閨門。以通天氣。[韋應物閨門懷古詩] 獨鳥下高樹。遙知吳苑園。淒涼千古事。日暮倚閨門。[陳後宮43] 茂苑城如畫。閨門瓦欲流。[河內詩・湖中548] 閨門日下吳歌遠。陂路綠菱香滿滿。

萼綠華 [眞誥一運象篇] 萼綠華者。女仙也。年可二十許。上下青衣。顏色絕整。以晉穆帝昇平三年己未十一月十日夜降於羊權家。自云是南山人。不知何仙也。……綠華云。我本姓楊。又云。是九嶷山中得道羅郁也。……以先罪未滅。故暫謫降臭濁。以償其過。(道藏本は讀みにくいので太平廣記五七による) [韋應物有萼

綠華歌》[白居易霓裳羽衣歌] 上元點鬢招萼綠。王母揮袂別飛瓊。(原注 許飛瓊。萼綠華。皆女仙也) [李賀答贈詩] 本是張公子。曾名萼綠華。[重過聖女祠2] 萼綠華來無定所。杜蘭香去未移時。[補編九梓州道興觀碑銘] 羅郁倘遊。遽分條脫。安妃乍至。或送交梨。

2 昔年

[文選四十二魏文帝與朝歌令吳質書] 昔年疾疫。親故多離其災。[唐太宗元日詩] 草秀故春色。梅艷昔年妝。[出關宿盤豆館323] 昔年曾是江南客。此日初爲關外心。

相望 [古詩十九首之三] 兩宮遙相望。雙闕百餘尺。[玉臺新詠九張率擬樂府長相思二首之二] 長相思。久別離。所思何在若天垂。鬱陶相望不得知。[何遜秋夕贈從兄詩] 相思對綠絲。相望隔巍巍。

抵 [漢書五四李陵傳] 陵且戰且引。南行數日。抵山谷中。(師古曰。抵。當也。至也。其下亦同) ……四五日。抵大澤葭葦中。[皇甫冉長安路詩] 結束趨平樂。聯翩抵狹斜。[中元作275] 有城未抵瀛洲遠。青雀如何鴉鳥媒。

天涯 [古詩十九首之一] 相去萬餘里。各在天一涯。[玉臺新詠五江淹古體] 君子在天涯。妾心久別離。[李白愁陽春賦] 若使春光可攬而不滅兮。吾欲贈天涯之佳人。[白居易代書詩一百韻寄微之] 無慘當歲杪。有夢到天涯。[天涯305] 春日在天涯。天涯日又斜。天涯的語を含む義山詩は、その他に西溪48・憶梅49・朱槿花二首之二579、馮浩・張采田はいずれも梓州の幕下の作とする。長

安を遠く離れた地。

3 一夜

〔徐陵烏棲曲二首之二〕 繡帳羅帷隱燈燭。一夜千年猶不足。

〔李益夜上受降城聞笛詩〕 不知何處吹蘆管。一夜征人盡望鄉。

秦樓

義山の用例には二つの方向がある。(1)〔東南514〕且向秦樓棠樹下。每朝先覓照羅敷。——〔玉臺新詠一日出東南隅行〕日出東南隅。照我秦氏樓。秦氏有好女。自言名羅敷。(2)〔送千牛李將軍赴關五十韻550〕會與秦樓鳳。俱聽漢苑鶯。——〔列仙傳〕蕭史。

秦穆公時。善吹簫。能致白鶴孔雀。公女字弄玉好之。以妻焉。遂教弄玉作鳳鳴。居數十年。鳳皇來至其屋。爲作鳳臺。(類聚七八)さらに李白には別の用例がある。(3)〔白頭吟二首之二〕妾有秦樓鏡。照心勝照井。——〔西京雜記三〕高祖初入咸陽宮。府庫珍寶尤異者有方鏡。……女子有邪心。則膽張心動。秦始皇常以照宮人。膽張心動者則殺之。

朱鶴齡・馮浩は(2)の方向に解し、ここの秦樓客を、孔雀詠の秦客と同じく蕭史を指すとす。〔和孫朴韋蟾孔雀詠12〕此去三梁遠。今來萬里攜。西施因網得。秦客被花迷。(朱鶴齡注 秦客未詳。集內無題詩。豈知一夜秦樓客。偷看吳王苑內花。疑即此秦客。又補注 按列仙傳・水經(渭水)注。俱云。蕭史吹簫。能致白鶴孔雀。此秦客以對上西施。其用秦樓蕭史事無疑)(馮浩注 徐(逢源)曰。蕭史事。言能致孔雀。不可以秦客代孔雀也。此與一夜秦樓客。皆別有出處。未詳。按。謂網得珍禽。愛玩若迷也。秦客當是蕭史。他詩之吳王苑內花。亦正是西施)しかし、馮注に引

く徐逢源は異議を出しているし、上記とはまた別の考え方をとることもできる。

4 偷

〔庾信結客少年場行〕 定知劉碧玉。偷嫁汝南王。〔陳後主三婦豔詩十一首之九〕 大婦怨空閨。中婦夜偷啼。

吳王苑內花

〔馮浩注〕 暗用西施。〔杏花217〕 吳王採香逕。失

路入煙村。〔陸廣微吳地記〕 香山。吳王種香於此。遣美人采之。故名。下有采香徑。通靈巖山。今名箭溪。山北地有上園下園者。

皆吳王藝花處也。〔吳宮329〕 吳王宴罷滿宮醉。日暮水漂花出城。〔景陽井494〕 腸斷吳王宮外水。濁泥猶得葬西施。〔和鄭愚贈汝陽王孫家爭妓二十韻553〕 羌管促蠻柱。徒醉吳宮耳。滿內不掃眉。吳王對西子。〔李白口號舞人半醉詩〕 姑蘇臺上宴吳王。西施醉舞嬌無力。〔文選三九枚乘上書重諫吳王〕 夫漢并二十四郡十七諸侯。……脩治上林。雜以離宮。積聚玩好。圜守禽獸。不如長洲之苑。(服虔曰。吳苑也。韋昭曰。長洲在吳東)

吳喬

* *

義山就王茂元之辟。慮綢見疎。故酬別(令狐補闕)詩258有青萍肯見疑之句。今因禮遇之隆。喜出望外。

朱彝尊

意自可曉。不必泥秦樓吳苑等字。

姚培謙

屈復

六一九頁參照。

甚自幸。然未得顯然明看。終是恨事。

程夢星

第二首。言官職之祕書省。人皆以爲清秩。猶天上應眞之位。固已所昔聞而仰望者。當其未得。遠若天涯。及其既得。似爲固有。豈知事有不然。時復多變。竟如秦樓之客。不過偷看吳苑之花而已。可勝歎哉。

紀昀 六一九頁參照。

馮浩

秦樓客。自謂墮於王氏也。但義山兩爲祕書房中官。一在開成四年。是年卽出尉弘農。一在會昌二年。而王茂元於武宗卽位初。由涇原入朝。會昌元年。出鎮陳許。則蹤跡皆不細合矣。或茂元在鎮。更有家在京。或係王氏之親戚。而義山居停於此。頗可與街西池館28及可歎207等篇參悟。亦大傷輕薄矣。

張采田

〔會箋〕次章。意尤顯了。萼綠華以比衛公。閨門在揚州。舊紀。寶曆二年。鹽鐵使王播奏。揚州舊漕河水淺。今從閨門外古七里港開河向東。取禪智寺橋東通舊官河。是也。此指淮南。下言從前我於衛公。可望而不可親。今何幸竟有機遇耶。秦樓客。自謂王茂元婿也。觀此則祕省一除。必李黨汲引無疑。義山本長章奏。中書掌誥。固所預期。當衛公得君之時。藉黨人之力。頗有立躋顯達之望。而無如文人命薄。忽丁母憂也。此實一生榮枯所由判歟。自趙臣璠謂此義山在茂元家。竊窺其閨人而作。於是解者紛紛。不知是年茂

元方鎮陳許。卽開成四年義山釋褐校書。茂元亦在涇州。蹤跡皆不相合。馮氏亦知其不通。則又創爲茂元有家在京之說。更引街西池館等篇實之。義山不但無特操。且從此爲名教罪人矣。何其厚誣古人如是哉。

〔辨正〕六二〇頁參照。

近代注釋

〔森〕中卷七九頁。〔鈴木〕六四頁。〔高橋〕六六頁。〔劉〕八八頁。

* * *

義山の無題詩十六首中、連作は四篇あるが、本篇の場合は二首があたかも長歌と反歌を思わせる有機的な連關を持つように見え、注釋者はみなその線に沿って解するが、高橋だけは連作として扱わない。

1 萼綠華はすなわち4句吳王苑内花だろうが、吳の地と別に關係はない。ただ閨門の原義たる天門に引っかけて元は天上界に住まいし絶世の美人、ぐらいのつもりで用いたか。義山の用典はかなりに氣ままである。

2 相望ないし望抵は、(1)望んで望んで望みぬくほど憧れていた、(2)渴望のあまりそこまで行つた、と二様に解せるが、(1)をとる。歲月へだてたむかし(から)遙かに天の涯までも視線をとどこすほどだった。

3・4 あにはからんや、この長安の地の高殿に、ある夜、その夜

かぎりの客となった身が、吳王の庭園に咲きはこる西施にもまがう花のような人をかいま見ようとは。秦樓客はむろん作者で、第一首の「余」と相應するものである。朱彝尊のいうように秦樓は典故にこだわらず、單に長安の貴人の館とみなすべきだ。

(松尾良樹)

無題四首之一 114

來是空言去絕蹤 來るとは是れ空言 去りて蹤を絶つ

月斜樓上五更鐘 月は斜めなり樓上 五更の鐘

夢爲遠別啼難喚 夢に遠別を爲し 啼けども喚び難く

4 書被催成墨未濃 書は成すを催され 墨未だ濃からず

蠟照半籠金翡翠 蠟照半ば籠む 金翡翠を

麝熏微度繡芙蓉 麝熏微かに度る 繡芙蓉に

劉郎已恨蓬山遠 劉郎已に恨む 蓬山の遠きを

8 更隔蓬山一萬重 更に隔つ蓬山一萬重

校

1 蹤 朱鶴齡本・全唐詩「踪」

3 喚 毛本「換」^{一作} 錢寫本「換(?)」を「喚」に改む。

5 照 高麗本・唐詩鼓吹七「燭」

6 熏 叢刊本・唐詩統籤・唐詩類苑一三八「薰」 唐詩鼓吹「香」

微 高麗本 「數」^{一作}

繡 高麗本・唐詩鼓吹「綉」

上平三鍾 (蹤・鐘・濃・蓉・重)

韻

*

1 空言 (史記八高祖本紀) (漢五年) 正月。諸侯及將相。相與

共請尊漢王爲皇帝。漢王曰。吾聞帝。賢者有也。空言虛語。非所守也。吾不敢當帝位。〔文選一六司馬相如長門賦〕奉虛言而望城台。期城南之離宮。脩薄具而自設令。君曾不肯乎幸臨。

絕蹤 (史記八六刺客聶政傳) 今乃以妾尙在之故。重自刑以絕

從。〔集解 徐廣曰。恐其姊從坐而死。索隱 從。音蹤。……

徐氏以爲從坐。非也。正義 本爲嚴仲子報仇訖。愛惜其事。不

令漏泄。以絕其蹤迹。妾其奈何畏歿身之誅。終滅賢弟之名。〔文

選二二謝靈運於南山往北山經湖中瞻眺詩〕石橫水分流。林密蹊絕

蹤。〔李白估客行〕海客乘天風。將船遠行役。譬如雲中鳥。一去

無蹤跡。〔白雲夫舊居346〕牆外萬株人絕迹。夕陽唯照欲棲鳥。

2 こういう情景は、義山詩の場合おおむね孤獨の身にとって辛い

特別な時間をあらわしている。たとえば〔代應二首之二133〕溝水

分流西復東。九秋霜月五更風。義山七絕集釋稿(二)(本學報五

一冊) 五八一頁参照。

月斜樓上 (庾肩吾和徐主簿望月詩) 樓上徘徊月。窓中愁思人。

(藝文類聚一) (元稹西縣驛詩) 去時樓上清明夜。月照樓前撩亂花。

(玉臺新詠五庾丹秋閨有望詩) 月斜樹倒影。風至水迴文。〔白

居易涼夜有懷詩〕燈盡夢初罷。月斜天未明。〔古詩十九首之二〕

盈盈樓上女。皎皎當牕牖。

樓上の語には階上〔代贈二首之二238〕樓上離人唱石州〕および樓外の空間〔行至金牛驛340〕樓上春雲水底天〕の二義あり。さらにいづれとも分ちがたい場合がある〔代贈二首之一237〕樓上黃昏欲望休。玉梯橫絕月中鉤〕。この詩もしかりである。

3・4 〔白居易初與元九別後忽夢見之及寤而書適至詩〕夢中握君手。問君意何如。君言苦相憶。無人可寄書。覺來未及說。叩門聲冬冬。言是商州使。送君書一封。〔又江南喜逢蕭九徹五十韻〕歲月何超忽。音容坐渺茫。往還書斷絕。來去夢遊揚。〔碧瓦79〕夢到飛魂急。書成即席遙。〔腸212〕故念飛書及。新歡借夢過。〔曉起214〕書長爲報晚。夢好更尋難。〔思歸422〕魚亂書何托。猿哀夢易驚。〔端居163〕遠書歸夢兩悠悠。〔贈從兄閔之328〕私書幽夢約忘機。

3 〔玉臺新詠七蕭綸代秋胡婦閨怨詩〕知人相憶否。淚盡夢啼中。〔又一〇徐悱婦題甘蕉葉示人詩〕夕泣以非疎。夢啼眞太數。〔白居易琵琶行〕夜深忽夢少年事。夢啼妝淚紅闌干。〔元稹遣病十首之十〕夢別淚亦流。啼痕暗橫枕。

遠別 〔文選二九蘇武詩四首之二〕黃鵠一遠別。千里顧徘徊。〔李白贈別鄭判官詩〕遠別淚空盡。長愁心已摧。〔和鄭愚贈爭妓二十韻553〕一曲送連錢。遠別長於死。

喚 〔廣韻去聲二九換〕喚。呼也。ここでは相手に向って直接に名前（か二人稱）を、あるいは来てとかおーいとか、呼ばわるのである。〔樂府詩集四六讀曲歌八十九首之二十八〕憐歡敢喚

名。念歡不呼字。連喚歡復歡。兩誓不相棄。〔玉臺新詠一〇戴嵩詠欲眠詩〕拂枕重紅氍。迴鑾復解衣。旁邊知夜久。不喚定應歸。〔李白長干行二首之一〕十四爲君婦。羞顏未嘗開。低頭向暗壁。千喚不一回。

4 催成 用例未見。

墨未濃 〔杜甫同元使君春陵行〕作詩呻吟內。墨淡字欹傾。

5・6 〔送千牛李將軍赴關五十韻550〕別館蘭薰酷。深宮蠟焰明。〔玉臺新詠七簡文帝雍州曲・南湖〕銀綸翡翠鉤。玉舳芙蓉舟。翡翠と芙蓉の對は義山詩に三例。〔無題120〕裙衩芙蓉小。釵茸翡翠輕。〔獨居有懷250〕數急芙蓉帶。頻抽翡翠簪。〔鏡檻301〕鏡檻芙蓉入。香臺翡翠過。

5 蠟照 義山以前の用例未見。〔吳融追詠棠梨花十韻〕夜宜紅蠟照。春稱錦筵遮。

籠 〔文選六左思魏都賦〕雷雨竊冥而未半。燉日籠光於綺寮。〔又三一江淹雜體詩鮑參軍戎行〕寒陰籠白日。太谷晦蒼蒼。〔李注〕夏侯湛歎秋賦曰。陰籠景而下翳。〔杜牧泊秦淮詩〕煙籠寒水月籠沙。夜泊秦淮近酒家。

金翡翠 翡翠は鴛鴦や雙燕同様に男女親睦の象徴。〔玉臺新詠九沈約春日白紵曲〕翡翠羣飛飛不息。願在雲間長比翼。〔又劉孝威擬古應教詩〕雙棲翡翠兩鴛鴦。巫雲落月乍相望。金翡翠が何を指すか、屏障・帷帳・燈籠・衾・鉤・釵その他實に様々に解しうる。白樂天と李賀の用例〔白居易寄獻北都留守裴令公詩〕舞臺金

翡翠。歌頸玉鱗鱗。〔李賀少年樂樂府〕陸郎倚醉牽羅袂。奪得寶釵金翡翠。からすればかんざしだが、蠟照半籠の對象物としてはそぐわず、むしろ杜詩（6句繡芙蓉の注参照）によって、一應屏障としておく。〔劉邊繁華應令詩〕金屏障翡翠。藍帕覆籠籠。

6 〔玉臺新詠五庚丹秋聞有望詩〕羅襦曉長襪。翠被夜徒薰。〔又七簡文帝和徐錄事見內人作臥具詩〕縫用雙針縷。絮是八蠶綿。香和麗丘蜜。麝吐中臺煙。〔獨居有懷250〕麝重愁風逼。羅疎畏月侵。

麝熏 〔白居易和春深二十首之二十〕蘭麝熏行被。金銅釘坐車。〔李賀楊生青花紫石硯歌〕紗帷晝暖墨花香。輕溫漂沫松麝薰。

度 〔玉臺新詠八鮑泉落日看還詩〕衣香遙已度。衫紅遠更新。

繡芙蓉 芙蓉Ⅱ蓮は男女愛憐の情の象徴。南朝樂府に頻出。

〔樂府詩集四四子夜夏歌二十首之八〕乘月採芙蓉。夜夜得蓮子。

〔又四六讀曲歌八十九首之六十七〕嬌笑來向儂。一抱不能已。湖燥芙蓉萎。蓮汝藕欲死。〔李賀惱公詩〕密書題荳蔻。隱語笑芙蓉。

〔王琦注 題荳蔻者。密喻有同心之訂。笑芙蓉者。隱語相憐愛之意〕繡芙蓉もまた衾褥・衣帶・帷帳など様々に解しうるが、やはり杜詩によって衾褥と見なしておく。〔杜甫李監宅詩〕屏開金孔雀。褥隱繡芙蓉。〔玉臺新詠六王僧孺爲人述夢詩〕以親芙蓉褥。

方開合歡被。

7・8 〔寫意392〕三年已制相思淚。更入新愁却不禁。

7 〔漢書二五上郊祀志〕自〔齊〕威・宣・燕昭使人入海求蓬萊・方丈・瀛洲。此三神山者。其傳在勃海中。去人不遠。蓋嘗有至者。

諸僊人及不死之藥皆在焉。其物禽獸盡白。而黃金銀爲宮闕。……終莫能至云。世主莫不甘心焉。〔師古曰。甘心。言貪嗜之心不能已也〕〔又〕〔李〕少君言上。……臣嘗游海上。見安期生。安期生食臣棗。大如瓜。安期生僊者。通蓬萊中。合則見人。不合則隱。於是天子始親祠竈。遣方士入海求蓬萊安期生之屬。……入海求蓬萊者。言蓬萊不遠。而不能至者。殆不見其氣。上乃遣望氣佐候其氣云。……天子既已封泰山。無風雨。而方士更言蓬萊諸神若將可得。於是上欣然庶幾遇之。復東至海上望焉。〔漢武故事〕上欲浮海求神仙。海水暴沸涌。大風晦冥。不得御樓船。乃還。

劉郎 〔李賀金銅仙人辭漢歌〕茂陵劉郎秋風客。夜聞馬嘶曉無跡。〔海上謠455〕紫鸞不肯舞。滿翅蓬山雪。借得龍堂寬。曉出撲雲髮。劉郎舊香炷。立見茂陵樹。なお、幽明錄・續齊諧記および搜神記（明鈔本太平廣記六一天台二女條）に見える劉阮天台の話の劉晨を當てる説もあるが、話の中に恨蓬山遠を意味する個所はなく、やはり漢武説の方が妥當。但し、裏に劉晨をも連想しつつ、より一般的に遊冶郎の代名詞の意味合いをも含むか。

蓬山 〔劉孝綽侍宴餞張惠紹應詔詩〕滄池誠自廣。蓬山一何峻。〔藝文類聚二九〕〔魏知古玄元觀尋李先生不遇詩〕神仙不可見。寂莫返蓬山。蓬山はもとより蓬萊山だが、ここには女仙もあまた住むはずである。例の韓偓の香奩集に〔思錄舊詩於卷上淒然有感因成一章〕緝綴小詩鈔卷裏。尋思閑事到心頭。自吟自泣無人會。腸斷蓬山第一流。〔戴叔倫長門怨樂府 自憶專房寵。曾居第一流〕こ

うした蓬山のイメージは義山と韓偓に限らない。〔長恨歌〕忽聞
海上有仙山。山在虛無縹緲間。樓閣玲瓏五雲起。其中綽約多仙子。
なお、後漢書二三賢章傳「學者稱東觀爲老氏臧室道家蓬萊山」に
もとづき、蓬山は東觀を指すとする説は、ここには當てはまらな
いと考える。王勃の上明員外啓、白樂天の吳秘監每有美酒獨酌獨
飲詩、元稹の酬盧秘書詩、義山の補編四爲河東公與周學士狀など
では、蓬山は明かに祕書省を指しているけれども。

8 一萬重 〔杜甫傷春五首之一〕關塞三千里。煙花一萬重。〔白
居易夜爭詩〕弦凝指咽聲停處。別有深情一萬重。

* *

吳喬

此詩與相見時難。皆是致書於綯時作。卽舊傳所言屢啓陳情也。

1 言綯有軟語而無實情。

2 言作詩時。

5・6 兩句從第二句來。

朱彝尊

3 已別而復夢。遠別故夢。

何焯

〔讀書記〕無題四首。此等只是艷詩。楊孟載說。迂繆穿鑿。風雅
之賊也。

〔評本〕

3・4 夢別書成。爲遠被催。啼難墨未。皆用雙聲疊韻對。

李義山七律集釋稿（一）

7 小馮云。應首連。

徐德泓

傳載令狐綯作相。義山屢啓陳情。綯不之省。數首疑爲此作也。俱
是喻體。此篇首二句。言信杳而時將盡矣。然癡情不醒。夢寐繫之。
急切裁書。亦不及修飾也。五六二句。想象華顯之地。隨言此地。
前已恨其遠。今不更遠乎。時李不得補官。故云。

陸鳴皋

起得飄空。來無蹤影。有春從天上之意。與昨夜星辰等篇同法。

姚培謙

按原本。此題共四首。後二首。一則五律。見卷三。一則七言古詩
也。見卷二。此章極言兩人情懷之未易通。開口便將世間所謂幽期
密約之醜。盡情掃去。其來也固空言。其去也已絕踪。當此之時。
真是水窮山斷。然每到月斜鐘動之際。黯然魂銷。夢中之別。催成
之書。幽憶怨亂。有非膠漆之所能喻者。乃知世間咫尺天涯之苦。
正在此時。遙想翡翠燈籠。芙蓉幃幙。所謂其室則邇。其人甚遠。
縱復瀝血剖腸。誰知我耶。

屈復

一。相期久別。二。此時難堪。三。夢猶難別。四。幸通音信。五
六。孤燈微香。咫尺千里。七八。遠而又遠。無可如何矣。

程夢星

星按此四首。則已入茂元幕府時感歎之作。第一首。起句。言來居
幕府。曾是何官。已去祕書。竟絕踪跡。次句。言幕中供職之勤。

夜則月斜。曉則鐘動。比昌黎所謂辰而入盡酉而歸者爲更甚焉。三句。言自別蘭臺。夢中豈無涕泣。無如其無可訴語。四句。言自掌書記。未免受人促迫。往往不待其墨濃。五六。又追憶祕書省之事。宿直紫禁。親見翡翠金屏。身近御爐。香度芙蓉繡幕。何其樂也。七八。謂今則君門萬里。比之漢武求仙。雖未得至蓬山。猶邀王母之降。若已甫授祕書省。竟未得入。是則較蓬山之遠。更爲過之矣。

紀昀

〔詩說下〕何以無題四首。不取第一第三第四首也。曰。此四首純是寓言矣。第一首。三四句。太纖小。七八句。太直而盡。第三首。稍有情致。三四。亦纖小。五六。亦直而盡。第四首。尤淺薄徑露。大抵無題是義山偶然一種。本非一生精神所注。頗不欲多存。以後凡無題。皆不入鈔也。

馮浩

此四章。與昨夜星辰二首。判然不同。蓋恨令狐綯之不省陳情也。首章。首二句。謂綯來相見。僅有空言。去則更絕蹤矣。令狐爲內職。故次句點入朝時也。夢爲遠別。緊接次句。猶下云隔萬重也。書被催成。蓋令狐促義山代書而攜入朝。文集有上綯啓。可推類也。五六。言留宿。蓬山。唐人每以比翰林仙署。怨恨之至。故言更隔萬重也。若誤認豔體。則翡翠被中。芙蓉褥上。既已惠然肯來。豈尙徒託空言而有夢別催書之情事哉。

張采田

〔會箋〕文集（四）有上兵部相公啓云。令書元和中太清宮寄張相公舊詩上石者。昨一日書訖。令狐綯大中四年十月以兵部尙書同平章事。五年四月換禮部尙書。義山是年春初還京。詩有書被催成語。正指其事。以四章白日當天證之。詩作於三月子直未改禮部時也。首章。紀令狐來調。匆匆竟去之事。蠟照二句。去後寂寞景況。結言從前內相位望。已恨懸隔。今則禮絕百寮。真不啻雲泥萬里矣。〔辨正〕夢爲二句。即碧瓦詩夢到飛魂急。書成即席遙之意。碧瓦一首。疑亦同時所作。皆爲子直詠也。彼詩用事稍晦。此四首較明顯。學者當參觀之。

文集有上兵部相公啓云。令書元和中太清宮寄張相公舊詩上石者。昨一日書訖。令狐綯大中四年十月以兵部尙書同平章事。五年四月兼禮部。時義山於五年春罷徐幕來京。此篇書被催成。即指其事。味其寫景。皆係春間。當是自徐還京。五年二三月間所作。未幾。即補太學博士矣。以詩意攷之。蓋子直漸有轉圜也。

首章記子直來調。匆匆竟去之事。蠟照二句。去後寂寞景況。結言子直位望。已恨懸隔。今則緣方一面。已隔三生。所謂水去雲迴之恨也。

無題詩格。創自玉谿。且此體祇能施之七律。方可宛轉動情。統觀全集。無所謂纖俗浮靡者。若後人倣效玉谿。誠有如紀氏所譏摹擬剽賊。積爲塵規者。然豈能眞得玉谿萬一邪。紀氏欲因後人倣效之不善。歸罪於創始之人。聽斷未免太不公矣。

黃侃

啼難喚者。言悲思之深。墨未濃者。言草書之促。五六句。指所憶之地言。

廖文炳

此有幽期不至。故言來是空言而去已絕跡。待久不至。又當此月斜鐘盡之時矣。惟其空言。所以夢爲遠別。啼難喚醒。而裁書作答。催成墨淡也。想君此時蠟燭猶籠。麝香微度。而我不得相親。比之劉郎之恨。不更甚哉。劉郎宜指劉晨。

胡以梅

此詩內意。起言君臣無際會之時。或指當路止有空言之約。二三四。是日夕想念之情。五六。言其寂寞。七八。言隔絕無路可尋。若以外象言之。乃是所歡一去。芳踪便絕。再來却付之空言矣。五更有夢。驚遠別而猶啼。訊問欲通。徒情濃而墨淡。爲想蠟照金屏。香薰繡箔。仙娥靜處。比劉郎之恨蓬山更遠也。……劉郎。劉阮之劉。蓬山。蓬壺。劉晨阮肇。天台遇仙子。別後不能再見。恨隔蓬山也。

近代注釋

〔森〕下卷三二四頁。〔鈴木〕六五頁。〔高橋〕六九頁。〔劉〕六二頁。〔安徽師大〕一九五頁。〔陳〕三五頁。

* * *

舊說を類別すれば、A 遇合説、B 艷情説、C 折衷説（内意は遇合・外象は艷情）となり、陸鳴皋・黃侃は不詳。

A₁ 對象特定（令狐綯） 吳喬・紀昀・馮浩・張采田

A₂ 對象特定（王茂元） 程夢星

B 何焯・姚培謙・屈復・廖文炳・鈴木・高橋・劉
C 胡以梅・森・安徽師大・陳

1・2 來ると言ったのはうそ。去ってしまったって行方知れない。今はもう月も傾いて、ここ樓上に、五更を告げる鐘の音が聞えてくる。直接的な斷定で始まる。主人公の口から出た、あるいは心の中のモノローグである。「空言」も「絶蹤」も非常に強い語調のようだ。「去絶蹤」には、何度も來る來る言いながら、結局は、踪跡を全く消して、消息をつかむ術がないという意味が、用例などからうかがわれる。2句は時と場の提示。「五更」は、義山詩にもよく見られるが、たとえば韓偓「香奩集」に男女の一晚の出會いと別れを詠ずる「五更」という題の詩があり、特定のニュアンスを持つ。一晚中待ったが、とうとう五更になってしまった。さてこそ1句の詠嘆が生まれる。樓には或いは青樓の意味あいがあるか。來れば空言 去れば蹤を絶つ、と讀み、相手が一度來て空言を残して歸ったとする説（馮浩・張采田）は無理で、安徽師大は1句を夢境的虚幻、2句を夢醒後の悵惘とするが、これもどうか。ある特別の一夜、最後と思われる一夜を想定した方がよいであろう。結局、相手はあらわれず、1句の斷言があるのだが、まだあきらめきれない所が次の二句である。

3・4 實際には會えなかったけれど、夢の中で會えた。でもまた遙かに離別せねばならず、泣いてばかりで聲も出ない。目ざめて手紙書こうとするけれど、氣ばかり焦って墨の濃くなるのも待

でない。現實非現實の境をこえて相手とコンタクトする方法として、夢へとそして書へとすがりつく心情が表白される。催は使者とも考えられるが、やはり内面の焦りであるう。「徒情濃而墨淡」(胡以梅)。夢と書の對置表現のきわめて多量の使用は義山以前に見出し難い特色である。また3句も六朝から元稹に至る艶詩のかたちをさらに進展させた。紀昀は三四句太纖小というけれども、この一連は注目に値しよう。詩の緊張感はこので、最も高まり、絶望悲哀執着焦燥等々の心理が時々刻々に變轉動搖する。

5・6 蠟燭はその光によって金色の翡翠に飾られる屏風を半ば包み、麝香はかおって芙蓉の刺繡されるしとねの邊りに微かに流れる。部屋の物蔭に主人公が居るのだろう。4句までの激情のあとに放心したような姿かもしれない。屏風にせよしとねにせよ、誰かと共に見るはずの物なのに、今は空しく目に映る。翡翠と芙蓉に飾られた物の實體は明確でない。恐らく柔和な、ひろがりのある、輪廓の鋭くない物のようだ。が、その物よりも物の部分としての翡翠と芙蓉がどうしても目に入ってしまう。そこで情念は再び觸發され、次聯の強い嘆聲に導かれることになる。一見平凡な二句だが、蠟照・麝熏・半籠・微度、いずれも簡單には見當らない措辭で、義山の工夫を見るべきか。

7・8 むかし劉郎は、かの蓬萊山の遠いのを恨めしく思ったけれど、いまやその蓬萊山への道のりの萬倍ほども二人の間はへだっている——かのようにだ。實際のへだたりはともかく思う人にとっ

て咫尺も千里、というわけだ。劉郎の語に引かれてか、主人公を男とする解釋(鈴木・安徽師大・陳)はやはり無理か。また7句を相手の男が以前に吐いたせりふとする(高橋)のもどうか。1句で見捨てられた悲しみを叫んだ女主人公の思念が別のかたちで反復されている、として讀んでみた。何焯の引く馮班を参照。

この詩は、(a)凝縮された故事典故が無く、どちらかといえば白描的であり、(b)一寸相思一寸灰や相見時難別亦難など、義山獨特のアフォーリズムが見られず、高橋も指摘するように傳統的な聞怨の作に似ている。但し主人公と別に話し手(第三者)の存在を假定するならば、7・8句はよりスムーズに讀解できるし、一風變った構造を持つことにもなる。

無題四首を馮浩は大中三年(八四九)に、張采田は大中五年に係けるが、何れも明確な根據があるとは思われない。ちなみに高橋・安徽師大は係年せず。

(西村富美子・松岡秀明)

無題四首之二 115

颯颯東南細雨來 颯颯東南 細雨來る

芙蓉塘外有輕雷 芙蓉塘外 輕雷有り

金蟾鑿鎖燒香入 金蟾鎖を鑿み 香を燒きて入り

4 玉虎牽絲汲井廻 玉虎絲を牽き 井を汲みて廻る

賈氏窺簾韓掾少 賈氏簾を窺う 韓掾少く

宓妃留枕魏王才

宓妃枕を留む 魏王才あり

春心莫共花爭發

春心花と發くを爭う莫れ

8 一寸相思一寸灰

一寸の相思 一寸の灰

校

1 南

朱鶴齡本・全唐詩・唐詩類苑一三八「風」

馮浩本校注

「一作風」

何焯讀書記「風作南」

8 一寸灰

叢刊本・稿本「一寸灰」

韻

上平十五灰（雷・廻・灰）十六哈（來・才）同用

*

1 颯颯

〔楚辭九歌山鬼〕雷填填兮雨冥冥。猿啾啾兮狖夜鳴。風颯颯兮木蕭蕭。

颯颯兮木蕭蕭。

〔王逸注〕言己在深山之中。遭雷電暴雨。猿號狖

响。風木搖動。以言恐懼失其所也。〔楊師道中書寓直詠雨簡褚起

居上官學士詩〕窗臨鳳凰沼。颯颯雨聲來。電影入飛閣。風威凌吹

臺。

東南

〔禮記鄉飲酒義〕天地溫厚之氣。始於東北。而盛於東南。

此天地之盛德氣也。此天地之仁氣也。〔玉臺新詠〕日出東南隅行

日出東南隅。照我秦氏樓。秦氏有好女。自言名羅敷。〔又三陸機

爲顧彥先贈婦詩二首之二〕東南有思婦。長歎充幽閨。〔文選三〇

陸機擬明月皎夜光〕招搖西北指。天漢東南傾。〔李善注〕李陵詩

曰。招搖西北馳。天漢東南流。〔梁簡文帝中婦織流黃〕浮雲西北

起。孔雀東南飛。〔李嶠雨詩〕西北雲膚起。東南雨足來。

李義山七律集釋稿（一）

細雨來

〔杜甫梅雨詩〕湛湛長江去。冥冥細雨來。〔玉臺新詠

七蕭繹夜游柏齋詩〕風細雨聲遲。夜短更籌急。〔張正見陪衡陽王

遊耆闍寺詩〕清風吹麥隴。細雨濯梅株。〔劉復春雨詩〕細雨度深

閨。鶯愁欲懶啼。如煙飛漠漠。似露濕淒淒。義山に細雨の詩三首

342 582。

2 芙蓉塘

〔曹丕有芙蓉池作〕〔吳均梅花落樂府〕何當與春日。

共映芙蓉池。〔朱鶴齡補注〕西洲曲。〔開門郎不至。出門採紅蓮〕

採蓮南塘秋。蓮花過人頭。義山詩芙蓉塘蓮塘。皆用此也。

有輕雷

〔禮記月令〕仲春之月……是月也。日夜分。雷乃發聲。

〔詩召南殷其雷〕殷其雷。在南山之陽。〔文選一六司馬相如長門

賦〕雷殷殷而響起兮。聲象君之車音。

3・4

〔劉復夏日詩〕暝日紗窗深且閑。含桃紅日石榴殷。銀瓶纔

轉桐花井。沉水煙銷金博山。文簾象床嬌倚瑟。綵奩銅鏡嬾拈環。

明朝戲去誰相伴。年少相逢狹路間。〔御覽詩〕

3

〔玉臺新詠二傳玄西長安行〕今我令聞君。更有令異心。香亦不

可燒。環亦不可沉。香燒日有歇。環沉日自深。〔又一〇近代西曲

歌陽判兒〕郎作沈水香。儂作博山爐。〔又王融代徐幹詩〕自君之

出矣。金爐香不然。〔梁簡文帝傷美人詩〕香燒日有歇。花落無還

時。

金蟾蠲鎖

〔李賀榮華樂〕金蟾呀呀蘭燭香。軍裝武妓聲琅琅

〔王琦注〕鑄金肖蟾形。爲燭臺薰爐之類。呀呀。蟾張口貌。〔高

似孫緯略九鎖香條〕李義山〔魏侯第東北樓堂345〕詩。鎖香金屈戌。

六三一

帶酒玉崑崙。又詩。金蟾嚙鑲燒香入。玉虎牽絲汲井回。此皆香器。其名鑲者。蓋有鼻鈕。施之於幃幃之中者也。〔唐詩鼓吹郝天挺注〕金蟾。卽鎖飾也。〔朱鶴齡注引道源注〕蟾善閉氣。古人用以飾鑲。〔促漏195〕睡鳴香爐換夕熏。

燒香入 〔漢官典職〕漢尙書郎。給端正侍女史二人。潔衣服。執香爐燒燭。從入臺中。〔初學記二五〕〔燒香曲588〕淳宮舊樣博山爐。楚嬌捧笑開芙蓉。〔鏡檻301〕鏡檻芙蓉入。香臺翡翠過。

4 〔玉臺新詠二魏明帝樂府二首之二〕種瓜東井上。冉冉自踰垣。

與君新爲婚。瓜葛相結連。〔又七簡文帝代樂府雙桐生空井〕季月雙桐井。新枝雜舊株。……還看西子照。銀牀牽鹿盧。〔又五庾丹夜夢還家詩〕歸飛夢所憶。共子汲寒漿。銅瓶素絲綆。綺井白銀牀。〔顧況悲歌六首之五〕新結青絲百尺繩。心在君家轆轤上。我心皎潔君不知。轆轤一轉一惆悵。〔張籍楚妃怨〕梧桐葉下黃金井。橫架轆轤牽素綆。美人初起天未明。手拂銀餅秋水冷。〔白樂天井底引銀餅 止淫奔也〕井底引銀餅。銀餅欲上絲繩絕。石上磨玉簪。玉簪欲成中央折。餅沈簪折知奈何。似妾今朝與君別。〔李涉寄荆娘寫眞詩〕章臺玉顏年十六。小來能唱西梁曲。……願分精魄定形影。永似銀壺挂金井。召得丹青絕世工。寫眞與身眞相同。

玉虎 ろくろ、つるべの何れか。〔鼓吹郝注〕玉虎謂轆轤也。〔朱注〕按玉虎是井欄之飾。或以施汲器者。老杜銅瓶詩。蛟龍半缺落。猶得折黃金。舊注云。蛟龍刻鑄瓶上。玉虎亦此類耳。絲。井索也。〔西京酬唱集下錢惟演直夜〕石蟪霜重連鉤盾。玉虎冰消

下轆轤。〔常建古意〕井底玉冰洞地明。琥珀轆轤青絲索。〔古樂府淮南王篇〕後園鑿井銀作牀。金瓶素綆汲寒漿。〔李賀染絲上春機詩〕玉壘汲水桐花井。舊絲沈水如雲影。錢惟演も玉虎をつるべと見たのだらうし、むしろつるべと解したい。

汲井 〔文選三〇謝靈運田南樹園激流植援詩〕激澗代汲井。揮槿當列墉。

5・6 〔徐陵玉臺新詠集序〕驚鸞冶袖。時飄韓掾之香。飛燕長裾。宜結陳王之珮。

5 〔世說新語惑溺〕韓壽美姿容。賈充辟以爲掾。充每聚會。賈女於青瑣中看。見壽。悅之。恒懷存想。發於吟詠。後婢往壽家。具述如此。并言女光麗。壽聞之心動。遂請婢。潛修晉問。及期。往宿。壽隔捷絕人。踰牆而入。家中莫知。自是充覺女盛自拂拭。說暢有異於常。後會諸吏。聞壽有奇香之氣。是外國所貢。一著人。則歷月不歇。充計武帝唯賜己及陳騫。餘家無香。疑壽與女通。充乃取女左右婢考問。卽以狀對。充祕之。以女妻壽。〔劉孝標注郭子謂與韓壽通者。乃是陳騫女。卽以妻壽。未婚而女亡。壽因娶賈氏。故世因傳是充女〕

6 〔文選一九曹植洛神賦李善注〕記曰。魏東阿王。漢末求甄逸女。旣不遂。太祖回與五官中郎將。植殊不平。晝思夜想。廢寢與食。黃初中入朝。帝示植甄后玉鏤金帶枕。植見之。不覺泣。時已爲郭后讒死。帝意亦尋悟。因令太子留宴飲。仍以枕資植。植還度轅轅。少許時將息洛水上。思甄后。忽見女來。自云。我本託心君王。其

心不遂。此枕是我在家時從嫁。前與五官中郎將。今與君王。遂用薦枕席。懽情交集。豈常辭能具。爲郭后以糠塞口。今被髮羞將此形貌。重觀君王爾。言訖。遂不復見所在。遣人獻珠於王。王答以玉珮。悲喜不能自勝。遂作感甄賦。後明帝見之。改爲洛神賦。

李注にいう「記」が何を指すかは未詳であり、こうした稗史野乘を引く李善の見識を云々する向きもあるが（三國志一九曹植傳盧弼集解）、さらに尾緒をつけた話が裴鏘「傳奇」にも見えており（中華書局本太平廣記三一蕭曠條校注「明鈔本作出傳奇」。また王夢鷗「唐人小說研究」七四頁参照）、唐代ではよく知られた故事のひとつであつたらしい。義山はこの故事を愛用する。代魏宮私贈174・代元城吳令暗爲答175・涉洛川233・東阿王248など。なお甄后を曹操曹丕が奪ひ合つた話がやはり世説惑溺篇に見える。

宓妃 「洛神賦李善注」漢書音義。如淳曰。宓妃。宓義氏之女。溺死洛水爲神。

魏王才 曹植の文才は七歩の才（世説文學篇）とも八斗の才とも稱される。〔李嶠百詠・詩〕天子三章傳。陳思七步才。〔可歎207〕宓妃愁坐芝田館。用盡陳王八斗才。〔補編一〇道士胡君新井碣銘序〕八斗知慙。四科奚取。〔蒙求（子建八斗）原注〕謝靈運曰。天下才共有一石。子建獨得八斗。我得一斗。自古及今。同用一斗。奇才博敏。安有繼之。李翰のもとづいた典故については未詳、待考。（蒙求については興膳宏氏の示教による）

この魏王が曹植であることは疑いないが、植は陳王・陳思王

・東阿王と呼ばれており、魏王といえは普通曹操もしくは曹丕を指す。〔後漢書九獻帝紀〕（建安）二十五年春正月庚子。魏王曹操薨。子丕襲位。……冬十月乙卯。皇帝遜位。魏王丕稱天子。〔庚信詠園花詩〕裏衣偏定好。應持奉魏王。（倪蟠注 魏王。魏文帝也）

7 春心 「楚辭招魂」目極千里令傷春心（王逸注 言湖澤博平。春時草短。望見千里。令人愁思而傷心也。或曰蕩春心。蕩。滌也。言春時平望遠。可以滌蕩愁思之心）魂兮歸來哀江南。〔玉臺新詠九蕭繹春別應令四首之一〕花朝月夜動春心。誰忍相思不相見。〔元稹折枝花贈行詩〕櫻桃花下送君時。一寸春心逐折枝。別後相思最多處。千株萬片繞林垂。〔錦瑟1〕莊生曉夢迷蝴蝶。望帝春心託杜鵑。

花爭發 「李嘉祐送王牧往吉州調王使君詩」野渡花爭發。春塘水亂流。

8 「莊子齊物論」南郭子綦隱几而坐。仰天而嘘。嗒焉似喪其耦。顏成子游立侍乎前。曰。何居乎。形固可使如槁木。而心固可使如死灰乎。今之隱几者。非昔之隱几者也。〔杜甫鄭駙馬池臺喜遇鄭廣文同飲詩〕白髮千莖雪。丹心一寸灰。灰と化するのは蠟燭か、〔溫庭筠晚坐寄友人詩〕遺簪可惜三秋白。蠟燭猶殘一寸紅。〔無題150〕蠟炬成灰淚始乾。（後出六四六頁）〔如有57〕良宵一寸豔。回首是重幃。香の連想に據ったか、〔玉臺新詠九吳均行路難〕博山爐中百和香。鬱金蘇合及都梁。……玉階行路生細草。金爐香炭變

成灰。得意失意須臾頃。非君方寸逆所裁。

* *

朱鶴齡

窺簾留枕。春心之搖蕩極矣。迨乎香銷夢斷。絲盡淚乾。情焰熾然。終歸灰滅。不至此。不知有情之皆幻也。樂天和微之夢遊詩序。謂曲盡其妄。周知其非。然後返乎真。歸乎實。義山詩卽此義。不得但以艷語目之。

吳喬

6 言己才藻足爲國華。綢不拔擢也。

朱彝尊

3·4 入迴二字相應。言來去之難也。

5 幸而合。

6 不幸而終不合。

7·8 其同歸於盡。則一也。

何焯

〔評本〕三句。言外之不能入。四句。言內之不能出。防閑亦可謂密矣。而窺簾留枕。春心蕩漾如此。此以見情之一字。決非防閑之所能及也。

1·2 雷雨之動滿盈。則君子經綸之時也。曰細。曰輕。蓋冀望而終未能必之詞。與結處呼應。

5·6 言雜進者多。不殊病樹前頭萬木春也。

5 年不如。

6 勢不逮。

7·8 小馮云 所謂止乎禮義也。

徐德泓

首句。蒙晦之象。次句。雷字。從風雨字生出。雷車奔逐。而曰塘外。曰輕。喻趨捷徑者。是以私謁侯門者。如齧鑲而入。暗相援引者。似牽絲而汲也。五六句。言一愛少。一憐才。今非少年。而又無憐才者。徒爲熱中何益乎。故結語云云。

陸鳴皋

義山用事。大半借意。如賈氏二語。只爲一少字才字。是屬確解。而人舍此不求。徒以窺簾留枕事實之。則失作者之意。而前後上下自成格塞。知此始可與讀李也。

姚培謙

此章極言相憶之苦。首句。暗用巫雲事。思之專而恍若有見也。次句。暗用古詩雷隱隱動妾心語。思之專而恍若有聞也。計此時。金蟾齧鎖。非侍女燒香莫入。玉虎牽絲。或侍兒汲井時迴。惆悵終無益耳。於是春心一發。妄想橫生。念賈氏之窺簾。或者憐我之少。如宓妃之留枕。或者憐我之才。要之念念相續。念念成灰。畢竟何益。至此則心盡氣絕時矣。

屈復

此詩寓意在友朋遇合。言凶終隙末也。一二。時景。三四。當此時而汲井方回。燒香始入。五六。卽從三四托下。于是簾窺韓掾。枕留宓妃。須臾之間。不可復得。故七八。以春心莫發。自解自歎。

而情更深矣。

程夢星

第二首。專言幕中。蓋作此寂寂之歎。起二句。言雷雨飄蕭。秋花冷落。以興起無聊之景。三四。言晨入暮歸情況。曉則伺門啓焚香而入。晚則見轆轤汲井而歸。蓋終日如是也。五六。似當時官奴而言。謂窺簾賣女。留枕宓妃。邂逅之間。亦嘗相遇。七八。春心字。相思字。緊接上聯。然發乎情。止乎禮義。不得不自戒飭。如香山所謂少日爲名多檢束者。故曰莫發。曰心灰也。

紀昀

〔詩說上〕起二句。妙有遠神。不可理解而可以意喻。（評本「不可：意喻」を「可以意喻。從詩殷其雷化來」に作る）○魏王字。合是陳王。爲平仄所牽耳。賈氏窺簾。以韓掾之少。宓妃留枕。以魏王之才。自顧生平。豈復有分及此。故曰春心莫共花爭發一寸相思一寸灰。此四句是一提一落也。（評本「顧」を「揣」に、「豈復有分及此」を「諒非所顧」に、「此四句：也」を「言思之無益也」に作る）○四首皆寓意也。此作較有蘊味。氣體亦不墮卑瑣。（評本「四首皆寓意之作。此首較有韻味。不落纖瑣。」）○無題諸作。大抵感懷託諷。祖述乎美人香草之遺。以曲傳其鬱結。故情深調苦。往往感人。特其格不高。時有太纖太靡之病。且數見不鮮。轉成窠臼耳。歸愚以爲剪綵爲花。絕少生韻。固不足以服其心。而效者又摹擬剽賊。積爲塵劫。無病而呻。有更甚於漢人之擬騷者。他體已然。七律尤甚。流弊所至。殆不勝言。存此一章。聊

以備義山一種耳。（評本 本條を四章に係ける。六四五頁參照）

馮浩

次首。首二句。紀來時也。三句。取瓣香之義。四句。申汲引之情。五句。重在掾字。謂己之常爲幕官。六句。重在才字。謂幸以才華。尙未相絕。結則嘆終無實惠也。

張采田

〔會箋〕次章。盼其重來。金蟾句。瓣香甚切。玉虎句。汲引無由。後四句。言賈氏窺簾。以韓掾之少。宓妃留枕。以魏王之才。我豈有此哉。相思寸灰。深歎思之無益也。（辨正「重」を「再」に、「甚切」を「已久」に作り、「言」字なく、「寸」を「一寸」に作る）

黃侃

古詩。雷隱隱。感妾心。側耳傾聽非車音。第二句略用其意。以興三四句。言所憶者之自外獨歸也。五六句以下。則禁約閒情之詞。言情事與韓壽曹植既殊。則徒思無益也。

東風細雨。所以興起輕雷。而輕雷又非眞雷。乃以擬車聲也。三四句。亦所以足第二句之意。言其自外獨歸而已。非必眞有燒香汲井之事也。

廖文炳

此言細雨輕雷之候。思其人所在。燒香入而金蟾鎖。汲井迴而玉虎牽絲。亦甚寂寞矣。然而窺簾留枕。則未嘗無意於韓掾魏王也。末則如怨如訴。相思之至。反言之而情愈深矣。

胡以梅

内意。一二。言陰蒙而天日爲蔽。三四。言隔絕不通。五六。羨古人之及年少而用才。七八。不能與衆芳齊艷。使人灰心耳。外象。則起言東南不日出而有細雨。是不能照見所歡之樓矣。蓮塘可遊而有雷聲。則所歡不能出而採蓮矣。想其靜處遙深。惟有燒香汲井。欲得賈氏恣妃之憐才愛少。既不可得。此心莫與春花爭發。已令人思之灰心。……樂府採蓮曲。皆述採蓮女妖艷之詞。金蟾或指鎖飾。或指香器之鼻釵。入字。蓋言雖嚙而香氣可入。與嚙字相應。玉虎。卽井上轆轤。廻字。蓋絲牽而轆轤廻轉。與牽字相應。樂府中汲井。每以美人爲說也。……按此詩五六。說明賈氏魏王。大露圭角。翻是假托之詞。而非真有私暱事可知。決不犯對題直賦也。

近代注釋

〔森〕下卷三三〇頁。〔鈴木〕六五頁。〔高橋〕四四頁。〔劉〕六四頁。〔安徽師大〕一九六頁。〔陳〕三六頁。

* * *

舊説はやはり、種々の寓意を讀みとる説、艷情説、折衷説に分けられるが一々あげない。ただ、李義山Ⅱ屈原説の事實上の開祖たる朱鶴齡さえこの詩は艷情の作とみとめているのは注目に値しよう。

1・2 遠景であろう。さっさと、かばそくもひそやかに東南の方角へ小糠の雨がやってきた。はちすの池のかなた、かるやかに春雷が起る。雲雨の故事、蓮塘、雷聲をふまえる象徴的な景であ

る。

3・4 深窓の佳人の住まい、近景。黄金の蝦蟇の香爐が、鎖を嚙むようなかっこうで釣り下げられ香がたかれながら、入って来る。玉の虎のつるべが井戸繩にひかれ、水を汲んで上って来る。入・廻の主語を令嬢なり侍女なりにとるより、素直に讀む。むろん入・廻の作動主體は人間だが。イメージそのものの讀解がまず難儀だが、いかなる意味を持ったイメージかの判讀は一層困難だ。同じ七律の3・4句でも、劉復のそのの平板さに比較すれば、義山のこの二句の深さは中々に底が知れない。しかし敢えて判讀すれば、1・2句が男女のまさに會合せんとするのを象徴する景だったのに對し、ここそ男女和合そのものの暗喩なのではないか。純然たる敘景の句と解しても十分に美しいけれども、ここは深讀みするのが義山詩讀者にとつての義務であろう。蘇雪林（玉溪詩謎）は今一步の解を下す。「此言宮禁極嚴。但昔日爲燒香事。我曾混進一次也。」「戀愛極難。等於井底之水。但有轆轤。又有井索。我居然汲水而回了。」

5・6 高橋は一般的に愛の芽生えから終焉に至るまでと解する。だが兩句みな禮教的には許されざる愛なのであり、そうした愛の悲しさ・重さゆえに次の7・8句の發言があるのではないか。買家の娘がひそかに簾のかげからかいまみた、わが父の部下韓壽はすばらしい若者だった。洛水の女神となって皇后が思い出の枕にちぎり交した義弟の魏王はすばらしい才子だった。陸鳴皋によれ

ば、要するに自らの少と才がいたかったことになるが、この詩が體驗なのか架空の作かは簡單には分るまい。

7・8 ああ春の心よ戀の心よ咲きほこる花々に負けずに開こうとしてはならぬ。情の焰が一寸燃えあがってもたちまち一寸の灰になつてしまふほかないのだ。

主人公を男とするか（鈴木・高橋・劉）女とするか（安徽師大・陳）よりも、第三者の視線をみとめるか否かが重要であり、高橋・劉は第三者の客觀敘述として譯している。樂府や故事詩ならば通常のことだが、むしろ重苦しいほどの雰圍氣を持つ七律において、主人公と話し手が分けられるのはやはり異例ではなからうか。

（横山 弘）

無題四首之三116 《附載》

合情春晚晚 情を含みて 春晚晚

暫見夜闌干 暫く見るに 夜闌干

樓響將登怯 樓響き 將に登らんとして怯じ

4 簾烘欲過難 簾烘し 過ぎんと欲して難し

多羞釵上燕 多^{すこ}羞 釵上の燕に

眞愧鏡中鸞 眞に愧ず 鏡中の鸞に

歸去橫塘曉 歸り去る 橫塘の曉

8 華星送寶鞍 華星 寶鞍を送る

李義山七律集釋稿（一）

校

1 晚 叢刊本・稿本「晚^{一作院}」 統籤・全唐詩・唐詩類苑一三八

校注「一作院」馮浩本校注「一作院。誤」

7 曉 底本・類苑・朱鶴齡本「晚」 叢刊本・統籤・錢寫本・毛

本・高麗本などに從つて改む。

韻

上平二十五寒（干・難・鞍）二十六桓（鸞）同用

*

1 含情 「文選二〇王粲公讌詩」今日不極懽。含情欲待誰。（李

注 含情謂合其歡情而不暢也）〔梁簡文帝東飛伯勞歌二首之一〕

可憐年幾十三四。工歌巧舞入人意。白日西傾楊柳垂。含情弄態兩

相知。〔杜甫春日江村五首之五〕異時懷二子。春日復含情。〔李遠

贈友人詩〕佳人惜別看嘶馬。公子含情向翠蛾。

春晚晚 「張說錢唐州高使君詩」淮流春晚晚。江海路蹉跎。

〔武元衡同諸公送柳侍御裴起居詩〕長亭春晚晚。層漢路蹉跎。

〔春雨274〕遠路應悲春晚晚。殘宵猶得夢依稀。〔送牛牛李將軍赴

關五十韻550〕蕙留春晚晚。松待歲時命。〔楚辭哀時命〕自日晚晚

其將入兮。哀余壽之弗將。（王逸注 將猶長也。言日月西流。晚

晚而歿天。時不可留）〔文選一六陸機歎逝賦〕時飄忽其不再。老

晚晚其將及。

暫見 「文選二五劉琨答盧諶書」時復相與舉觴對膝。破涕爲笑。

排終身之積慘。求數刻之暫歡。〔宋欽贈高允詩九章〕披衿暫面。

定交一言。〔溫庭筠更漏子詞六首之三〕金雀釵。紅粉面。花裏暫相見。

夜闌干 用例未見。〔朱鶴齡注〕古樂府〔善哉行〕。月沒參橫。

北斗闌干。闌干。橫斜貌。〔文選五左思吳都賦〕金鑑磊砢。珠珙闌干。〔劉洲林注〕闌干。猶縱橫也。〔長恨歌〕玉容寂寞淚闌干。梨花一枝春帶雨。

4 簾烘 〔李賀惱公詩〕玳瑁釘簾薄。琉璃疊扇烘。〔王琦注〕藝文類聚〔六一〕漢武故事曰。上起神屋。扇屏悉以白琉璃作之。光明洞徹。以白珠爲簾。玳瑁壓之。〔又許公子鄭姬歌〕銅甌酒熟烘明膠。古堤大柳烟中翠。〔石城56〕簾水將飄枕。簾烘不隱鉤。

5 釵上燕 〔洞冥記二〕元鼎元年。起招仙閣於甘泉宮西。……神女留玉釵以贈帝。帝以賜趙婕妤。至昭帝元鳳中。宮人猶見此釵。黃琳欲之。明日示之。既發匣。有白燕飛昇天。後宮人作此釵。因名玉燕釵。言吉祥也。〔聖女祠249〕寄問釵頭雙白燕。每朝珠館幾時歸。

6 鏡中鸞 〔范泰鸞鳥詩序〕昔鄼賓王結宜峻祁之山。獲一鸞鳥。王甚愛之。……三年不鳴。其夫人曰。嘗聞鳥見其類而後鳴。何不懸鏡以映之。王從其言。鸞覩形感契。慨然悲鳴。哀響中宵。一奮而絕。嗟乎。茲禽何情之深。〔玉臺新詠七蕭綱詠人棄妾詩〕獨鶴罷中路。孤鸞死鏡前。〔李賀且宮夫人詩〕長眉凝綠幾千年。清涼堪老鏡中鸞。

7 橫塘 〔玉臺新詠六吳均和蕭洗馬子顯古意六首之五〕妾家橫塘

北。發豔小長干。〔崔顥長干曲四首之一〕君家何處住。妾住在橫塘。普通は吳都賦を引き、吳の地名とされるが、〔劉方平烏栖曲二首之二〕門前月色映橫塘。感郎中夜度瀟湘。〔李賀大堤曲〕妾家住橫塘。紅紗滿桂香。〔王琦注〕橫塘。與大堤相近。其地當在襄陽。非金陵沿淮所築之橫塘也。のようにむしろ荆の地名と思われる場合があり、さらに〔溫庭筠惜春詞〕百舌問花花不語。低回似恨橫塘雨。のように特定の地名というより水邊の色街の代名詞と見るのが妥當な場合もある。こもそうであろう。

8 華星 〔曹丕芙蓉池作〕丹霞夾明月。華星出雲間。〔元稹古決絕詞三首之三〕曙色漸曛曛。華星次明滅。〔又會真詩〕方喜千年會。俄聞五夜窮。……華光猶冉冉。旭日漸曛曛。

寶鞍 用例未見。

* *

吳喬

3・4 末句有歸字。則知次聯。言在綢繆之次且也。義山石城詩。

又有簾烘不隱鉤。烘不可解。或者如畫家以空白雲氣處爲烘斷之意乎。

5 愧不如釵得近其人之身。

6 愧不如鸞之決然自絕。而猶戀戀一官。

7・8 楚詞〔九歌河伯〕言君恩之薄而曰。波滔滔以來迎。魚鱗鱗以勝予。言無人也。結語祖之。

朱彝尊

4 烘字難解。意香烟透出。簾中有人。故過之難。

何焯

〔評本〕

4 烘字下得好。他人不能。

徐德泓

此應以綢難見而云也。直待末後。而始得一見。故曰晚。曰暫。次聯。乃足將進而趨起意。然又不能與之決絕。殊愧釵燕鏡鸞之能脫離而去也。結到歸來景象。與首聯暮夜相應。

姚培謙

此寫咫尺天涯之感。樓前樓外。邈若山河。釵上之燕。夜來已卸。鏡中之鸞。夜來已掩。羞愧在此。橫塘歸路。惟有華星相送而已。其奈之何哉。

程夢星

第三首。從前首後四句生出。專咏官奴。開口含情暫見四字。分明揭出。春光已晚。春夜又闌。此時此際。未免有情。三四。言少年薄倖之事。有不可爲。亦有不易爲者。登樓豈無履聲。過簾亦見人影。惟有以禮自持而已。五六。言既以禮自持。故愛其釵燕而轉自羞。欲爲鏡鸞而繾自媿。七八。則敘其出院情景。每日歸時。華星已上。橫塘側畔。勞送歸鞍而已耳。

紀昀 六三七頁參照。

馮浩

三首。上四句。言徹夜候見。而終不得深談。五六。自嘆自愧。結

李義山七律集釋稿(一)

則言惟遣騎送歸。蒙其虛禮而已。以上三章。未必一夕間事。蓋類列之耳。

4 按。詩(小雅白華) 卽烘于燂。(傳) 烘。燎也。而實取照物之義。故用之。夜闌干。近五更。入朝時矣。樓響簾烘。聲光之盛。

我往就見。頗自慚爾。

8 此華星。啓明也。彼既入朝。我則歸矣。

〔補注〕按。徐陸合解頗通。故屢補采之。然余解似更詳確也。三章首句。既曰晚晚。則七句必當爲曉字。

張采田

〔會箋〕三章。紀往見令狐。亦匆匆一面。不容陳情之慨。首句。含情已久。次句。暫見而未能交歡。樓響句。足將進而趨起。簾烘句。人可望而難卽。五六。含羞抱媿之態。結言失意而歸。只有華星相送耳。

〔辨正〕首句。含情已久。惜乎太晚。次句。暫見而不能交歡。樓響句。足將進而趨起。簾烘句。可望而不可卽。次聯。寫含羞抱媿之態。結言無聊而歸。祇有華星相送耳。

三章。記往謁令狐。不見空同之恨。四章。歸來無聊之況。或三章。記往見令狐。亦匆匆一面。不容陳情之慨。四章。記歸來展轉思憶之情。

近代注釋

〔森〕下卷三三四頁。〔鈴木〕六五頁。〔高橋〕六四頁。〔陳〕一一三頁。

* * *

1・2 深い深い思いを内に秘めつつまっているうち春（の日）はエンバンとして終りに近づき、ほんのすこしあなたの顔をみたときには夜の氣配がすっかり濃くなっていた。2句の見の對象を夜闌干とするには、鈴木説のように暫と改めて讀むよりない。夜闌干も、一應陳永正説に従ったが、果してそれでよいかどうか。2句は難解である。

3・4 高殿にあがっていこうとすると、もの音（聲）におじけつき、すだれのあたりは、きらきらと照りかがやいて、通りすぎようとすけれどもちゅうちよしてしまう。

5 （けつきよく共にすごすことができず）かんざしの（天界にまで飛んでいった）燕に對して、たいへんに自分をはずかしくおもうし、（燕は女を暗示する）

6 また鏡にうつった自分の影をみて悲しみのあまり憤死した鸞鳥のように、私をまちくたびれて、鏡にうつった孤獨な姿をながめつつ、悲しみをしましたことだろう。ほんとうにもうしわけない。

7・8 思いをはたせぬまま、横塘から歸っていくときには、もう空もしらじらとあけて、美しくかがやく星が、すばらしい七寶の鞍をつけた馬にのって歸る私を送ってくれた。

（深澤一幸）

無題四首之四 117

《附載》

六四〇

何處哀箏隨急管 何れの處か哀箏 急管に隨う

櫻花永巷垂楊岸 櫻花の永巷 垂楊の岸

東家老女嫁不售 東家の老女 嫁せんとして售れず

4 白日當天三月半 白日天に當る 三月の半

溧陽公主年十四 溧陽公主 年十四

清明暖後同牆看 清明暖後 牆を同じくして看る

歸來展轉到五更 歸來展轉 五更に到り

8 梁間燕子聞長歎 梁間の燕子 長歎を聞く

校

4 日 屈復本「石」

5 溧 錢寫本旁注「漂」 毛本校注「一作漂」

韻

上聲二四緩（管） 去聲二八翰（岸・看・歎） 二九換（半） 同用
義山の古詩においても上聲去聲の通押は多い。

*

1・2 〔劉禹錫同留守王僕射（播）各賦春中一物從一韻至七詩〕
驚。能語。多情。春將半。天欲明。……管中緣催短笛。樓上來定
哀箏。千門萬戶垂楊裏。百轉如簧煙景晴。

1 哀箏 〔文選四二曹丕與朝歌令吳質書〕高談娛心。哀箏順耳。

〔侯瑾箏賦〕朱絃微而慷慨兮。哀氣切而懷傷。〔杜甫遣悶詩〕哀
箏猶凭几。鳴笛竟霜裳。〔哀箏307〕輕幃長無道。哀箏不出門。〔屈

復箋 哀箏爲題。與錦瑟同。錦瑟便有許多亂道。不知此首又作何解。

急管

〔玉臺新詠九鮑照代白紵歌辭二首之一〕催弦急管爲君舞。窮秋九月荷葉黃。〔王維魚山神女祠歌・送神〕悲急管兮思繁弦。神之駕兮儼欲旋。

2 櫻花

〔文選二七沈約早發定山詩〕野棠開未落。山櫻發欲然。
〔五臣注 翰〕曰。棠櫻皆果木名而開發其花也。花朱色如火欲然也。
〔李白久別離樂府〕別來幾春未還家。玉窓五見櫻桃花。〔王維勅賜百官櫻桃詩〕芙蓉闕下會千官。紫禁朱櫻出上闌。〔李綽秦中歲時記〕四月一日。薦內園櫻桃寢廟。薦訖。頒賜百官。各有差。

永巷

〔爾雅釋宮〕宮中街。謂之靈。〔郭注 巷。閭間道〕〔詩小雅巷伯序疏〕釋宮云。宮中巷。謂之靈。孫炎曰。巷。舍間道也。王肅曰。今後宮稱永巷。是宮內道名也。〔史記一二五佞幸李延年傳〕平陽公主言延年女弟善舞。上見。心說之。及入永巷。而召貴延年。〔漢書九七上外戚呂后傳〕呂后爲皇太后。乃令永巷囚戚夫人。髡鉗衣赭衣。令舂。〔又張后傳〕太后聞而患之。恐其作亂。乃幽之永巷。言帝病甚。左右莫得見。〔三輔黃圖六〕永巷。永。長也。宮中之長巷。幽閉宮女之有罪者。武帝時。改爲掖庭。置獄焉。唐詩においても、恐らくはより暗い連想を伴いながら後宮の意に用いられている。〔皇甫冉秋怨詩〕那堪閉永巷。聞道選良家。〔淚320〕永巷長年怨綺羅。離情終日思風波。義山以後には例外が一つある。〔鄭谷題進士王賀郊居詩〕前山微有雨。永巷淨無塵。

垂楊岸 〔三輔黃圖六〕長安御溝。謂之楊溝。謂植高楊於其上也。〔古今註上都邑第二〕おなじ。〔謝朓鼓吹曲〕飛臺來馳道。垂楊蔭御溝。

2 東家

〔文選一九宋玉登徒子好色賦〕臣里之美者。莫若臣東家之子。……然此女登牆闌臣三年。至今未許也。〔張夫人〔吉中孚侍郎妻〕拜新月詩〕東家阿母亦拜月。一拜一悲聲斷絕。……廻看衆女拜新月。却憶紅閨少年時。〔又玄集下〕〔元稹織婦詞〕東家頭白雙女兒。爲解挑紋嫁不得。〔原注 余據荆時。目擊貢綾戶有終老不嫁之女〕

老女

〔樂府詩集二五地驅歌樂辭四曲之二〕老女不嫁。踴地喚天。〔又捉搦歌四曲之一〕男兒千凶飽人手。老女不嫁只生口。

嫁不售

〔戰國燕策一燕王謂蘇代曰章〕且夫處女無媒。老且不嫁。舍媒而自銜。弊而不售。〔列女傳六齊鍾離春〕其爲人極醜無雙。……行年四十。無所容入。銜嫁不售。〔杜甫負薪行〕夔州處女髮半華。四五十無夫家。更遭喪亂嫁不售。一生抱恨堪咨嗟。

〔詩邶風谷風〕既阻我德。賈用不售。

4 白日當天

〔李白臨江王節士歌〕白日當天心。照之可以事明主。〔文選一班固東都賦〕功有橫而當天。討有逆而順民。〔韓愈奉和杜相公太清宮紀事十六韻〕皎潔當天月。歲暮捧日霞。

5 溧陽公主

〔南史八簡文帝紀〕初。景納帝女溧陽公主。公主有美色。景惑之。妨於政事。〔又八〇賊臣侯景傳〕大寶元年……三月甲申。景請簡文禪宴於樂遊苑。……簡文還宮。……景即與溧陽

主。共據御牀。南面並坐。

年十四

〔晉書一四侍堅載記〕初。堅之滅燕。〔慕容〕冲姊

爲清河公主。年十四。有殊色。堅納之。寵冠後庭。〔馮浩補注〕

深陽公主。年雖未考。而秦主苻堅滅燕。冲姊清河公主年十四。：

似可借用。猶富平少侯211之十三身襲歟。〔朱鶴齡注〕梁書。深陽

公主。簡文帝女也。年十四。有美色。ただし梁書にも南史にも年

十四とは見えず、待考。

6 同牆看

用例未見。牆は義山詩の語彙のうち、注目すべきもの

の一。〔代應22〕本來銀漢是紅牆。隔得盧家白玉堂。〔高花506〕宋

玉臨江宅。牆低不擬窺。

7 展轉

〔詩周南關雎〕悠哉悠哉。輾轉反側。〔又陳風澤陂〕寤

寐無爲。輾轉伏枕。〔楚辭九歎惜賢〕憂心展轉。愁怫鬱令。〔王逸

注〕展轉。不寤貌。詩云。展轉反側。〔文選二九曹丕雜詩二首之

一〕展轉不能寐。披衣起彷徨。〔又二三潘岳悼亡詩三首之二〕展

轉眄枕席。長簾竟牀空。〔玉臺新詠一秦嘉贈婦詩三首之一〕長夜

不能眠。伏枕獨展轉。〔長恨歌〕爲感君王展轉思。遂教方士殷勤

覓。詩經以來、展轉反側といえは男性の行爲のようだが、女性の

場合もないではなく、〔玉臺新詠一徐幹室思詩四章〕展轉不能寐。

長夜何綿綿。

8 梁間燕子

〔江總燕燕于飛樂府〕二月春暉暉。雙燕理毛衣。：

或在堂間戲。多從幕上飛。〔盧照鄰長安古意〕雙燕雙飛遠畫梁。

羅幃翠被鬱金香。〔杜甫姜楚公畫角鷹歌〕梁間鸞雀休驚怕。亦未

搏空上九天。〔文選二一郭璞遊仙詩七首之二〕雲生梁棟間。風出窓

戶裏。〔玉臺新詠一〇何遜爲人妾思詩〕燕子戲還簷。花飛落枕前。

〔杜甫春日梓州登樓二首之一〕雙雙新燕子。依舊已銜泥。

長歎。〔文選二九蘇武詩四首之三〕握手一長歎。淚爲生別茲。

〔又一六潘岳懷舊賦〕宵展轉而不寐。驟長歎以達晨。

* *

3 自比。

吳喬

5 比綯。

朱彝尊

2 永。長也。非宮中之永巷。

何焯

〔評本〕此篇明白。

深陽公主。又早嫁而失所者。然則我生不辰。寧爲老女乎。鳥獸

不失伉儷。展轉長嘆。殆不如梁間之燕子也。

4 懷春而後時也。

徐德泓

此又以老女傷春爲比。首二句。亦倒裝法。言聲在某地也。三月半。

則春垂盡。深陽二句。喻年少逢時者。而與之相形。尤不得不歸而

嘆矣。結得黯然淒絕。古樂府之遺也。

姚培謙

本集此首。乃無題四首之第四章。……前四句。寓遲暮不遇之歎。

溧陽二句。以逢時得志者相形。歸來二句。恐知己之終無其人也。讀至此首。前三章之寄託可知。○按義山自述（文集四上河東公啓）云。夙聞妙喻。常在道場。至於南國妖姬。叢臺妙妓。雖有涉於篇什。實不接於風流。可使國人盡保展禽。酒肆無疑阮籍。觀此四章。託興幽深。寄詞微婉。方知斯言之非欺我。

屈復

貧家之女。老猶不售。貴家之女。少小已嫁。故展轉長嘆。無人知者。惟燕子獨聞也。

程夢星

第四首。乃歸後索居之怨。起二句。言嬌絲脆竹。花明柳暗。春光爛熳。何處無之。三四。言已則如不售之女。空老流光矣。五六。是回思得意立朝者。有若年少女郎。儘堪遲嫁。豈知易售。一一乘時。不啻溧陽公主。十四已婚。七八。歸歎一身。羈棲遠地。感歎之情。不但無可語者。並無人聞之。其聞者惟梁間燕子耳。按。義山從事茂元。茂元方將以女妻之。則其時情致。所不能無。而原始要終。究歸大雅。不失風人之旨矣。朱長孺於第二首論之。謂不得但以豔詩目之。良是。殊不知四首皆然也。

紀昀

〔詩說〕六三七頁參照。

〔評本〕無題諸詩。大抵祖述美人香草之遺。以曲傳不遇之感。故情真調苦。足以感人。特詩格不高。往往失之纖俗。衍爲七律。尤易浮靡。且數見不鮮。轉成窠臼。歸愚（沈德潛）譏以剪綵爲花。

絕少生韻。固不足以服其心。然摹擬剽賊。積爲塵劫。自命名士風流。其弊有不可勝言者。讀義山詩者。不可不知。

馮浩

四章。又長言歎息之。首言何處告哀。固惟有此地耳。無鹽自喻。溧陽公主比令狐。末二句。重結歸字。聞長歎者。只有梁燕。令狐之不省。言外托出矣。載酒園詩話。摘書被催成墨未濃。及車走雷聲語未通。以爲真浪子宰相。清狂從事。何其妄作解人哉。

2 錢（良擇）曰。永。長也。非宮中之永巷。

4 言遲暮也。神來奇句。

張采田

〔會箋〕四章。紀歸來展轉思憶之情。何處二句。謂惟令狐一門。可以告哀。櫻花永巷。比子直得時貴顯也。老女不售。自喻。溧陽公主。比令狐。同牆看。亦可望而不可親之意。末二句。則極寫獨自無聊耳。四首各有綫索。如此解之。詩味倍長矣。馮氏句釋。未能分析。今爲拈出。紀曉嵐好倚撫古人。而此詩次章所說獨無誤。可從也。

〔辨正〕何處二句。謂惟有令狐可告哀。櫻花永巷。比子直得時貴顯也。老女不售。自喻。溧陽公主。比令狐。同牆看。亦可望不可親之意。末二句。歸家悵望景況也。

四首各有綫索。如此解之。詩味倍長矣。馮氏句下所釋。未能分析。今爲拈出。紀氏此段所說獨無誤。可喜也。

黃侃

第四詩。乃有所求于人而人不見諒之詞也。

近代注釋

〔森〕下卷三三六頁。〔鈴木〕六六頁。〔高橋〕七三頁。〔安徽師大〕一九七頁。〔陳〕二四一頁。

* * *

1・2 どこだろう。かなしげな筆の音が急調子の笛を追うように奏でられているのは。それは、櫻桃の花咲く後宮の奥深く、楊のしだれる岸邊なのだ。その場所は老女の居る所で、恐らく筆を彼女が奏でていると解する。屈復が氣づいたように、哀筆も義山詩中要注意の語。

3・4 東家は不嫁後家の枕詞に當ろう。終に不縁のまま老いた宮女。今、時は、白日が中天に高くかかる晩春三月半ば。この女性の春も去ってゆく。三月半ばは2句の櫻花垂楊を受け、5句の清明暖後へ續く。老女を貧家の女とする屈復・安徽師大説は根據に乏しい。

5・6 さて、溧陽公主は眉目うるわしく、そのため叛臣侯景が強引に年十四で妃にしたというが、あたかも彼女を思わせるうら若き姫君と、塀のあちらとこちらで顔を見あわせた。清明節も過ぎいよいよ暖かくなるころに。同牆を森以下おおむね史書を受けて同席と解するが、思いかわす男と女を隔てる、文字通りのかべとして、義山の艶詩に頻用される牆の字を、そう簡単に見過してしまつてよいものか。

7・8 歸來あの人思えば寝つかれず展轉反側している間に五更のころとなつてしまった。この長歎息を誰が聞く、それはうつばりの邊りに巢くう番いの燕であつた。

こうした解釋では前四句と後四句のつながりに緊密さを缺くうらみが残る。しかしながら、晝間見た男女の姿を思い、夜も眠れず悶悶とする老婆、というイメージ——鈴木以外の注釋者たちが描く——は、中國古典詩としては異様にすぎよう。主體を老女とせず、話し手の男性と考えるならば、この詩もさほど不自然でなく樂府體の艶詩とみなすことができる。

先の無題二首とことなり、この四首に一貫した内容的連關性をもとめるのは不可能であろう。それだけに、第四首は寓意明瞭だから、他の三首も同様な寓意あり、と決めつける舊説は直ちに肯定さるべきかどうか。この詩自體の寓意が眞實動かしがたい説得力を持つておればまた別だが。

(松岡秀明)

無題150

相見時難別亦難	相見るときは難く	別るるも亦難し
東風無力百花殘	東風力無く	百花殘す
春蠶到死絲方盡	春蠶死に到つて	絲方めて盡き
4 蠟炬成灰淚始乾	蠟炬灰と成りて	淚始めて乾く
曉鏡但愁雲鬢改	曉鏡但だ愁う	雲鬢の改まるを

夜吟應覺月光寒 夜吟應に覺ゆべし 月光の寒きを

蓬山此去無多路 蓬山此より 多路無し

8 青鳥殷勤爲探看 青鳥殷勤 爲に探看せよ

校

4 炬 瀛奎律髓七・唐詩鼓吹七「燭」 高麗本校注「一作燭」

6 吟 高麗本「琴」

覺 錢寫本「共(?)」を「覺」に改む。 瀛奎律髓「共」

韻

上平二十五寒(難・殘・乾・寒・看)

*

1 「曹丕燕歌行二首之二」 別日何易會日難。山川悠遠路漫漫。

「宋孝武帝丁督護歌六首之二」 辛苦戎馬間。別易會難得。〔戴叔倫織女詞〕 難得相逢容易別。銀河爭似妾愁深。〔曹植送應氏二首之二〕 山川阻且遠。別促會日長。〔陸機燕歌行〕 非君之念思爲難。離別何早會何遲。

相見 「文選二九蘇武詩四首之三」 行役在戰場。相見未有期。

「王融有所思」 如何有所思。而無相見時。〔李白相逢行〕 相見不得親。不如不相見。相見情已深。未語可知心。

2 東風無力 早春の東風は、もともと萬物に力を付け繁榮させるはずであるが、〔禮記月令〕 孟春之月……東風解凍。〔古詩十九首之十一〕 四顧何茫茫。東風搖百草。しかし、ここはむしろ晩春のいかにも力なげな風であろう。無力は多く女性の姿態に用いられ

る。〔何希堯柳枝詞〕 大堤楊柳雨沈沈。萬縷千條惹恨深。飛絮滿天人去遠。東風無力繫春心。〔溫庭筠郭處士擊甌歌〕 莫霽香夢綠楊絲。千里春風正無力。〔李賀美人梳頭歌〕 春風爛熳惱嬌慵。十八鬟多無氣力。〔玉臺新詠五沈約六憶詩四首之三〕 含唯如不飢。擊甌似無力。〔又八劉緩寒閨詩〕 纖腰轉無力。寒衣恐不勝。

3 百花殘 「大鹵平後書懷十韻556」 依然五柳在。況復百花殘。〔蕭子暉春宵詩〕 夜夜妾偏棲。百花含露低。

4 玉臺新詠一〇近代雜歌・蠶絲歌 春蠶不應老。晝夜常懷思。何惜微軀盡。纏綿自有時。〔樂府詩集四九西曲歌・作蠶絲四曲之二〕 續蠶初成繭。相思條女密。投身湯水中。貴得共成匹。

春蠶 「玉臺新詠二傳玄明月篇」 昔爲春繭(一作蠶)絲。今爲秋女衣。〔王僧孺初夜文〕 秋蛾拂焰而不疑。春蠶縈絲而靡悟。〔廣弘明集一五〕

4 焦がれるわが身を燭にたとえるのは「玉臺新詠一〇王融代徐幹詩」 思君如明燭。中宵空自煎。また、したたる蠟を涙にたとえるのは、〔梁簡文帝和湘東王古意詠燭詩〕 花中燭。似將人意同。憶啼流膝上。燭焰落花中。〔玉臺新詠八徐陵走筆戲書應令詩〕 今宵花燭淚。非是夜迎人。〔庾信對燭賦〕 銅荷承蠟淚。鐵鉞染浮烟。兩者が綜合されて、〔陳後主自君之出矣詩〕 思君如夜燭。垂淚著雞鳴。〔杜牧贈別二首之二〕 蠟燭有心還惜別。替人垂淚到天明。義山もしばしばこの比喻を用いる。〔獨居有懷250〕 蠟花長遞淚。箏

李義山七律集釋稿(一)

六四五

柱鎖移心。〔燕臺詩・冬54〕風車雨馬不持去。蠟燭啼紅怨天曙。

〔擬意58〕急絃腸對斷。剪蠟淚爭流。

蠟炬 〔梁簡文帝對燭賦〕綠炬懷翠。朱蠟含丹。〔杜甫西閣三

期嚴明府不到詩〕金吼霜鐘徹。花催蠟炬銷。〔補編九梓州道與觀
碑銘序〕且異金華。送江南之夜譙。寧同蠟炬。佐洛下之晨炊。

成灰 〔文選〕二八陸機挽歌詩三首之二。昔爲七尺軀。今成灰與

塵。〔玉臺新詠八徐君蒨共內人夜坐守歲詩〕簾開風入帳。燭盡炭
成灰。〔韓冬郎即席爲詩二首之一245〕十歲裁詩走馬成。冷灰殘燭
動離情。〔寄裴衡282〕離情堪底寄。惟有冷於灰。

5 曉鏡 〔李白秋日鍊藥院鑷白髮詩〕秋顏入曉鏡。壯髮凋危冠。

〔戴叔倫雨詩〕春帆江上雨。曉鏡鬢邊霜。

雲鬢改 〔玉臺新詠六吳均和蕭洗馬子顯古意六首之三〕綠鬢愁

中改。紅顏曉裏滅。〔韋應物淮上即事詩〕風波離思滿。宿昔容鬢改。

〔玉臺新詠五沈約少年新婚爲之詠〕羅襦金薄廁。雲鬢花釵舉。

〔江淹征怨詩〕獨枕凋雲鬢。孤鏡損玉顏。

6 〔李白夜坐吟〕冬夜夜寒覺夜長。沉吟久坐坐北堂。冰合井泉月

入閨。青缸凝明照悲啼。

夜吟 〔鮑照夜坐吟〕冬夜沉沉夜坐吟。含情未發已知心。〔孟

浩然宿楊子津寄潤州長山劉隱士詩〕不見少微星。星霜勞夜吟。

月光寒 〔王維沈十四拾遺新竹生讀經處同諸公之作〕細枝風響

亂。疎影月光寒。

なお、5・6句は李賀の詩が響いているか。〔長歌續短歌〕夜

峯何離離。明月落石底。徘徊沿石尋。照出高峯外。不得與之遊。
歌成鬢先改。

7 〔趙氏聞夫杜羔登第詩〕長安此去無多地。鸞鸞蔥蔥佳氣浮。

〔才調集一〇〕また唐詩紀事七八劉氏條参照

蓬山 六二八頁注参照。

此去 〔崔顥川上女詩〕暮來浪起風轉緊。自言此去橫塘近。去

は空間的または時間的距離をあらわす助字。

無多路 〔白居易送考功崔郎中赴闕詩〕青雲上了無多路。却要

徐驅穩著鞭。〔又因夢有悟詩〕夢中幾許事。枕上無多時。〔元稹留

呈夢得子厚致用詩〕心知魏闕無多地。十二瓊樓百里西。〔對雪二

首之一154〕龍山萬里無多遠。留待行人二月歸。

8 青鳥 〔山海經二西山經西次三經〕又西二百二十里。曰三危之

山。三青鳥居之。〔又一二海內北經〕西王母。梯几而戴勝杖。其

南有三青鳥。爲西王母取食。在昆侖虛北。〔又一六大荒西經〕西

有王母之山。……有三青鳥。赤首黑目。一名曰大鷲。一名少鷲。

一名曰青鳥。〔郭璞注〕皆西王母所使也。〔阮籍詠懷詩八十二首之

二十二〕誰言不可見。青鳥明我心。〔文選三一江淹雜體詩・阮步

兵詠懷〕青鳥海上遊。鸞鸞蒿下飛。唐代では直接西王母への連想

というより、一般的な文の使いとして、しかも蓬山に關係づけて

用いられる場合がある。〔李白相逢行〕願因三青鳥。更報長相思。

〔鮑溶望麻姑山詩〕自從青鳥不堪使。更得蓬萊消息無。〔中元作

275〕有娥未抵瀛洲遠。青雀如向鵲鳥媒。

殷勤 〔史記一一七司馬相如傳〕文君竊從戶窺之。心悅而好之。恐不得當。既罷。相如乃使人重賜文君侍者通殷勤。文君夜亡奔相如。〔文選二六謝靈運道路憶山中詩〕殷勤訴危柱。慷慨命促管。

〔玉臺新詠八王叔英妻劉氏和昭君怨詩〕漢使汝南還。殷勤爲人道。〔李白寄遠詩十二首之三〕本作一行書。殷勤道相憶。一行復一行。滿紙情何極。〔同中牡丹爲雨所敗二首之一584〕舞蝶殷勤收落葉。有人惆悵臥遙帷。

探看 サグリミルで一應意味は通ずるけれども用例未見。あるいは探友の探、たずねる、訪れる意にとれぬこともない。

* *

吳喬

1 見時難於自述。別後通書。又不親切。所以歎之。畢意致書猶易。故有此詩。

2 東風比絢。百花自比。上不引下也。

4 致光〔韓偓避地寒食詩〕云。一名所係無窮事。怎肯當年便息機。肥遯之士。莫容易笑人。

7・8 無多路。爲探看。侯門如海。事不可知。亦屢啓陳情事也。

朱彝尊

3 思作絲。猶淮作懷。古樂府有此。

何焯

〔讀書記〕

2 已蒼云。第二句。畢世接不出。按此句言光陰難駐。我生行休也。

李義山七律集釋稿(一)

〔評本 已蒼の下に「先生」の二字有り、「按此句言」を「所謂」に作る〕

6 覺作共。〔評本 「若作覺字。便知嚼蠟」の八字有り〕

〔評本〕東風無力。上無明主也。百花殘。已且老至也。落句。其屈子遠游之思乎。

3 古子夜歌(四十二首之八)春蠶易感化。絲子已復生。○接到好。

5 鏡字活。

7・8 末路不作絕望語。愈悲。

陸鳴皋

宋仁宗見東坡水調歌頭詞云。我欲乘風歸去。又恐瓊樓玉宇。高處不勝寒。嘆曰。蘇軾終是愛君。解此。可以得是詩之妙矣。

徐德泓

此詩應是釋褐後。外調弘農尉而作。純乎比體。首句。喻登進之難而去亦難。東風句。承別字來。風爲花之主。猶君爲臣之主。今日無力。已失所倚庇。而不得不離矣。然此情不死。故接以春蠶兩句。五六。又愁去後君老而寥寂也。末言使人探問。見情總難忘也。弘農離京不遠。故曰無多路。惓惓到底。風人緒音。

姚培謙

人情易合者必易離。惟相見難。則別亦難。情人之不同薄倖也。東風句。極摹消魂之意。然不但此際之消魂。春蠶蠟炬。到死成灰。此情終不可斷。中聯。鏡中愁鬢。月下憐寒。又言但須善保容顏。不患相逢無日。雖蓬山萬里。呼吸可通。但不知誰爲青鳥。能爲我

一達殷勤耳。○此等詩。似寄情男女。而世間君臣朋友之間。若無此意。便泛泛然。與陌路相似。此非粗心人所知。

屈復

三四。進一步法。結用轉筆有力。○離恨正當春暮。安能漠然。三四。比。即死後成灰。猶不能忘。何況春暮。但恐歲月如流。漸衰老耳。然幸而相近。可令青鳥探消息何如也。

程夢星

星按。此詩似邂逅有力者。望其援引入朝。故不便明言。而屬之無題也。起句。言繾綣多情。次句。言流光易去。三四。言心情難已於仕進。五六。言顏狀亦覺其可憐。七八。望其爲王母青禽。庶得入蓬山之路也。

紀昀

〔詩說下〕問相見時難一章末二句。如何。曰。感遇之作。易爲激語。此云蓬山此去無多路。青鳥殷勤爲探看。不爲絕望之詞。固詩人忠厚之旨也。三四。太纖近鄙。不足存耳。

〔評本〕此亦感遇之作。○三四。太鄙。七八。不作絕望語。詩人忠厚之遺。

馮浩

首言相晤爲難。光陰易過。次言己之愁思。畢生以之。終不忍絕。五言惟愁歲不我與。六謂長此孤冷之態。末句則謂未審其意旨究何如也。此段諸詩（馮浩の年譜で大中三年に係けられる三十首前後の作）。寓意率相類。

張采田

〔會箋〕此徐（州廬弘正幕）府初罷。寓意子直之作。春蠶二句。即諺所謂黃河心不死之意。結言此去京師。暫探其意旨之所向也。確是係時之作。觀起語自悟。

〔辨正〕三四兩句。如此典雅。而謂之鄙。此真小兒強作解事語。紀氏之詩學可知矣。

此篇爲陳情不省。留別令狐所作。首云。相見時難別亦難。結云。蓬山此去無多路。味其意。其在大中三年將赴徐幕時耶。徐辟在十月。義山至幕則爲明年正月。詩中東風等字。不必泥看。況十月亦可稱小春乎。

此詩蓋已至徐幕所作。故寫景皆係春時。與轉韻詩562蒲青柳碧春一色。正同。玩結語。知其非在京留別之作矣。

黃侃

次句。言無計相憐。任其蕉萃。三四句。自斂。五六句。斥所懷者。七八句則無由見顏色。還自託微波之意。

廖文炳

此言別之難因相見之難。而風軟花殘則有如天若有情天亦度也。自別之後。思未盡而淚未乾。惟有鏡容易改。吟興難窮耳。猶幸與君所居。相去不遠。青鳥殷勤。試一探看。或有望於別而再見也。

胡以梅

此首玩通章亦主角太露。則詞藻反爲皮膚。而神髓另在內意矣。若意作艷情解。近於怒張。非法之善也。細測其旨。蓋有求於當路而

不得邪。首言難得見易得別。別後不得再見。所以別亦難耳。次句。措詞媚極。百花殘。花事已過也。絲。思也。三四。謂心不能已。五恐失時。六見寂寥。結則欲托信再探之。青鳥。王母之爲當路。

近代注釋

〔森〕下卷三六二頁。〔鈴木〕七〇頁。〔高橋〕四九頁。〔劉〕六六頁。〔安徽師大〕一九三頁。〔陳〕四一頁。

* * *

1・2 ふたりの逢瀬（を得ること）は至難だが、逢えば別れがまた難儀。春が別れを告げんとするいま、春風はけだるく吹き、（そのため）あんなにも咲き誇っていた花々が見る影もなく凋れてしまった。

「相見」は男女の情會をいう。「難」は「艱也、不易也」という方向と「患也」という方向が渾然として用いられている。すなわち「相見時難」の「難」は、典據となる樂府詩句の方向からして前者のニュアンスが強いが、同時に「やがて別れが来ることを豫期しつつ逢瀬のさなかにあるつらさ」の意も「時」という語を契機として感じさせる。また、「別亦難」においても「別れがたい」から「別れもつらい」さらに「別れている時もむろんつらい」という風に、「難」のリフレインによってアンビギュイティが増幅されている。「東風無力」と「百花殘」とは逢瀬ののちの類唐寂寞の心象風景の並列であろう。この二句の奥底には、昂揚した時間（逢瀬と春）によって闡明されるいまの不確かさへの詠

嘆がある。無題詩の中でもこの一首はとりわけて、詩餘の世界との関連性が顯著のように思われる。ちなみに俞平伯は、李後主の名句「別時容易見時難」と義山の句とを、淺近と深美の對照の妙を示すものと論じている（『讀詞偶得』四六頁）。

3・4 春の蠶はその身の死するまで絲を吐き續ける。ひと思う身とてまた同じ。蠟燭は身を焼きつくし灰と成りおおせて始めて涙も乾く、愛の悲しみに身を焦がすものとて違いはない。

「春蠶」は前句の「春のおわり」という時間設定から導き出され、同旨の比喩を「蠟炬」に求めて對句を形成している。絲||思の雙關という樂府詩の常套的手法を用いつつ、愛染の世界に没入するものの心を具象的に描き出す。この隱喩は發想自體二句とも特に新しいものでないし、平俗とも見えかねぬ表現であり、紀昀の酷評（太纖近鄙）を招くことになった。しかし、對句としての完成度の高さと情感の豊かさ、さらに象徴性の深さ——それは義山の詩に時おり覗く「詩人という存在」の悲しみまで到達する（聞一多「紅燭」参照）——を持つこの一聯は彼の七律の詩句として最上のもののひとつであろう。

5・6 あの一とへの思いと涙の中で眠られぬまま明け方を迎えた私の傍に一つの鏡がある。私はとてもそこに自分の顔を映して見る氣にはなれないが、あの一ととて見事な黒髪も悲しみのあまり白くなってはいまいかと、ひたすら鏡を恐れているのではないか。夜更けての靜寂の中で詩を口ずさめば、あの一とも同じようにし

て冷やかな月光のもとで孤獨を噛みしめているに違いない。それが私にはわかるのだ。

この聯は主體が一體誰なのかわかりにくい所があり、それだけに詩の構造理解にもからむ重要な部分である。「曉鏡」「夜吟」とも第一義的には女性の側なる調度・行爲であろう。だが句頭にそれらが置かれることによって、同時に話者すなわち詩人自身のそれであることも暗示されている。ただそのことは落句たる第六句の方でより顯著になるのであり、「夜」「曉」の時間的先後からしても、敘述の順序が逆になっていると言つてよいだろう。それは、韻律上の要請から来るよりも、第三句の「春蠶」が直前の「東風」から引き出されたごとく、「曉鏡」は第四句の「蠟炬」と密接に結びついているからであり、さらに、敘述が前後することによつて詩前半の象徴世界の廣がりの後半に餘韻となつて持續するのである。

7・8 あの一との住む蓬萊山（にも比すべき場所）はここから多くの路のりとなない。どうか、西王母の使者・戀の使者なる青い鳥よ、この私のために手を盡してあの一との動靜を探ってきておくれ。

「無多路」は「相去不遠」（廖文炳）の意であり、白樂天などの用例からすれば、むしろ「無多の路」と訓すべきか。「探看」の看について、張相は「看。嘗試之辭。如云試試看」といい、本作品をも例證とする（匯釋卷三）。しかしそのように看の字固有の語

義として析出すべき必然性がみとめられるか、例によつて疑問があり、従つてこの語釋の確定にも決め手には使えない。尾聯に至つて詩は神仙の世界へと展開する。この構造は前出無題114と共通するが、その「劉郎已恨蓬山遠」はことと對照的である。この齟齬は「蓬山」に比せられた場所が何程の距離もないのに現實には近より難いのだと解される。また、一方が男性の立場として、月光のもとなる女性を思ふのに對して、他方は月光のもとに男性を恨む女性の立場という設定であるらしく、二つの詩は極めて密接に關連すると考えられる。

諸注釋中、(a)純粹に艷情の作とするのは廖文炳ほか鈴木・高橋・劉・陳。(b)遇合自傷の寄託ありとするのは何焯・徐德泓・陸鳴皋・姚培謙・紀昀・程夢星および森。なお吳喬・馮浩・張采田は對象を令狐綯に特定。(c)折衷説が胡以梅および安徽師大。馮浩は前出無題四首とともに大中三年（八四九）に繫年し、張采田はやはり令狐綯との交際關係を根據として大中五年に繫年する。繫年の是非はともかく（高橋・安徽師大ともに不編年）、やはり義山中期以後の作ではないだろうか。

（森瀨壽三）

無題二首之一 366

鳳尾香羅薄幾重 鳳尾の香羅 薄き幾重
碧文圓頂夜深縫 碧文圓頂 夜深に縫う

扇裁月魄羞難掩 扇は月魄を裁つも 羞掩い難く

4 車走雷聲語未通 車は雷聲を走らすも 語未だ通ぜず

曾是寂寥金燼暗 曾ち是れ寂寥 金燼暗く

斷無消息石榴紅 斷えて消息無く 石榴紅なり

斑驩只繫垂楊岸 斑驩只だ繫ぐ 垂楊の岸

8 何處西南待好風 何の處か西南 好風を待つ

校

5 暗 高麗本「斷^{一作暗}」

6 斷 高麗本「却」

7 驩 稿本「駐」

岸 高麗本「柳」

8 待 朱鶴齡本・全唐詩「任」 馮浩本校注「一作任。誤」

韻

上平一東（通・紅・風）

上平三鍾（重・縫）

廣韻では、一東を獨用、二冬三鍾を同用とするが、李義山の今體詩では冬鍾同用は僅か一例、逆に東鍾通用が七例もある。李義山詩の押韻の大きな特徴の一つである。

*

1 鳳尾香羅 〔朱鶴齡補注〕陳帆曰。鳳尾羅卽鳳文羅也。〔太上

黃庭經〕黃庭爲不死之道。受者齋九日。然後受之。……古者盟以

玄雲之錦九十尺。金簡鳳文之羅四十四。〔初學記二七〕〔庾信謝趙

李義山七律集釋稿（一）

王賁卓羅袍袴啓〕懸機巧織。變躡奇文。鳳不去而恒飛。花雖寒而不落。〔黃庭內景玉經沐浴章〕授者曰師受者盟。雲錦鳳羅金鈕纏。

〔王建宮詞〕羅衫葉葉繡重重。金鳳銀鵝各一叢。

〔南史四三〕江夏王鋒傳〕學爲書字。五歲。高帝使學鳳尾諾。一

學卽工。高帝大悅。以玉麒麟賜之。曰。麒麟賞鳳尾矣。〔元稹青

雲驛詩〕手持鳳尾扇。頭戴翠羽笄。

〔杜甫端午日賜衣詩〕細葛含風軟。香羅疊雪輕。〔溫庭筠七夕

歌〕夜軒紅粉陳香羅。鳳低蟬薄愁雙蛾。

羅薄 〔玉臺新詠六費昶華觀省中夜聞城外擣衣詩〕昨暮庭槐落。

今朝綺羅薄。〔燕臺詩・秋54〕瑤瑟悵悵藏楚弄。越羅冷薄金泥重。

2 碧文圓頂

〔姚培謙注〕程泰之演繁露。唐人婚禮。多用百子帳。

……按義山所謂碧文圓頂者。殆指此。蓋其始本以氍爲之。後或易

之以羅敷。〔馮浩注〕姚說近是。古所謂青廬也。但此頂上句。謂

羅帳。〔演繁露三・百子帳條〕唐人昏禮。多用百子帳。……蓋其

制本出戎虜。特穹廬拂廬之具體而微者耳。捲柳爲圓。以相連瑣。

可張可闔。爲其圓之多也。故以百子總之。亦非真有百圓也。其施

張既成。大抵如今尖頂圓亭子。而用青氍通冒四隅上下。便於移置

耳。白樂天有青氍帳（二十韻）詩。其規模可攷也。……有頂中央

聳。無隅四嚮圓。是頂聳旁圓也。既曰。影孤明月夜。又曰。最宜

霜後地。則是以知施張移置於月於霜。隨處悉可也。又曰。側置低

歌座。平鋪小舞筵。則其中亦差寬矣。……唐德宗時。皇女下降。

顏真卿爲禮儀使。如俗傳障車却扇花燭之禮。顏皆遵用不廢。獨言

氈帳本北虜穹廬遺制。請皆不設。其言氈帳。卽樂天所賦而宋之間所謂催鋪百子帳者。是也。〔南齊書五七魏虜傳〕以繩相交絡。紐木枝椹。覆以青繒。形制平圓。下容百人坐。謂之繖。一云百子帳也。於此下宴息。こは青廬そのものと見なす方がよいと思われる。但し、必ずしも婚禮に關係づける必要はない。白詩に見えるようにそのころ日常的に使用されていたらしいのだから。なお氈帳は、封氏聞見記五花燭條・西陽雜俎續集四貶誤・冊府元龜五八九・唐會要八三嫁娶參照。

〔元稹江梅詩〕梅含雞舌兼江氣。江弄瓊花帶碧文。〔蘇頌奉和聖製辛寶希玠宅詩〕圓頂圖嵩石。方流擁魏沙。

夜深縫 〔玉臺新詠一〇謝朓玉階怨詩〕長夜縫羅衣。思君此何極。

3 〔文選二七班婕妤怨歌行〕新裂齊紈素。皎潔如霜雪。裁爲合歡扇。團團似明月。出入君懷袖。動搖微風發。常恐秋節至。涼風奪炎熱。棄捐篋笥中。恩情中道絕。〔玉臺新詠一〇桃葉答王〔獻之〕團扇歌三首之三〕團扇復團扇。持許自障面。顚頰無復理。羞與郎相見。〔又七湘東王釋戲作豔詩〕搖茲扇似月。掩此淚如珠。〔擬意586〕妙選茱萸帳。平居翡翠樓。雲屏不取暖。月扇未障羞。こゝも婚禮と關連させることは可能だが、どうか。〔玉臺新詠五何遜看新婦詩〕何如花燭夜。輕扇掩紅妝。〔楊師道初宵看婚詩〕隱扇羞應慣。含情愁已多。〔代董秀才却扇310〕莫將畫扇出帷來。遮掩春山滯上才。若道團圓是明月。此中須放桂花開。却扇は六朝から

見える。〔庾信爲梁上黃侯世子與婦書〕分杯帳裏。却扇牀前。また敦煌文書にも〔下女詞〕去扇詩 青春今夜正方新。紅葉開時一朶花。分明寶樹從人看。何勞玉扇更來遮。千重羅扇不須遮。百美嬌多見不猜。侍娘不用相腰勒。中歸不免屬他家。〔敦煌變文二七六頁〕

月魄 〔玉臺新詠七梁武帝擬明月照高樓詩〕圓魄當虛闌。清光流思遠。〔梁簡文帝相官寺碑〕珠生月魄。鐘應秋霜。〔街西池館28〕疎簾通月魄。珍簾接煙波。〔馮浩注 詩中月魄則皆作月明用。蓋月之見爲魄。亦由漸有明意而然〕

4 〔文選一六司馬相如長門賦〕雷殷殷而響起兮。聲象君之車音。〔李注 言似君之車音也〕〔玉臺新詠六費昶有所思詩〕所思鬱不見。空想丹墀步。簾動憶君來。雷聲似車度。〔又孔翁歸奉和湘東王教班婕妤詩〕雷聲聽隱隱。車響絕瓏瓏。恩光隨妙舞。團扇逐秋風。こゝも婚禮の儀式ならば障車に結びつけはできようが。

語未通 〔玉臺新詠一徐幹室思詩三章〕浮雲何洋洋。願因通我辭。〔又八劉遵繁華應令詩〕本欲傷輕薄。含辭羞自通。

5 曾是 〔詩大雅蕩〕文王曰咨。咨女殷商。……曾是在位。曾是在服。〔箋〕云。穆公朝廷之臣。不敢斥言王之惡。故上陳文王。咨嗟殷紂。以切刺之。女曾任用是惡人。使之處位執職事也。〔論語爲政〕曾是以爲孝乎。〔集解 馬曰。孔子喻子夏服勞先食。汝謂此爲孝乎。未孝也。承順父母顏色。乃爲孝也〕〔文選二五謝靈運還舊園作見顏范二中書詩〕曾是反昔園。語往實款然。〔李注 毛

詩曰。曾是在位」〔杜甫寫懷二首之一〕非關故安排。曾是順幽獨。

寂寥 〔老子二五〕寂令寥令。獨立而不改。〔王弼注〕寂寥。

無形體也。無物之匹。故曰獨立也。〔楚辭九辯〕沈寥兮天高而氣清。宋慶合〔王逸注〕源瀆順流。漠無聲也。收潦而水清。〔文選

三〇〕謝惠連七月七日夜詠牛女詩〕沃若靈駕旋。寂寥雲幄空。

金爐 〔徐彥伯孤燭嘆詩〕切切夜闌冷。微微孤燭然。玉盤紅淚

滴。金爐彩光圓。暖手縫輕素。嘆蛾續斷絃。相思咽不語。同向錦屏眠。〔國秀集上〕

6 **斷** 〔助字辨略三〕斷 決辭。易繫辭〔下〕介如石焉。寧用終

日。斷可識矣。李義山詩。斷無消息石榴紅。〔訪人不遇留別館382〕閑倚繡簾吹柳絮。日高深院斷無人。

無消息 〔虞羲自君之出矣詩〕君出無消息。惟見黃鸝飛。〔玉

臺新詠七梁簡文帝倡婦怨情十二韻〕蕩子無消息。朱胥徒自香。

〔李遠失鶴詩〕華表柱頭留語後。更無消息到如今。〔丹丘354〕丹

丘萬里無消息。幾對梧桐憶鳳凰。

〔魏志四齊王紀〕毋丘儉上言昔諸葛恪圍合肥新城。城中遣士劉整。出圍傳消息。爲賊所得。消息の語、文選には見えぬようである。

る。

石榴紅 〔1〕石榴裙 〔朱鶴齡注〕道源注 梁元帝烏棲曲〔四首

之三。交龍成錦鬪鳳紋〕芙蓉爲帶石榴裙。〔玉臺新詠六何思澄南苑逢美人詩〕風捲葡萄帶。日照石榴裙。〔吳喬注〕則天〔如意娘〕

詩云。不信比來長下淚。開箱驗取石榴裙。紅字疑用此意。〔萬楚

五月五日觀妓詩〕眉黛奪將萱草色。紅裙妬殺石榴花。〔擬意586〕

夜杵鳴江練。春刀解若榴。〔馮浩注〕石榴酒可喻合歡。

〔梁簡文帝古意詩〕樽中石榴酒。機上葡萄漿。〔喬知之倡女行〕石榴酒。葡萄漿。……願君解羅襦。一醉同匡牀。〔寄惱韓同年二

首之二40〕我爲傷春心自醉。不勞君勸石榴花。〔南史七八夷貊傳上〕〔頓遜國〕又有酒樹。似安石榴。采其花汁停甕中。數日成酒。

〔3〕石榴花 〔玉臺新詠二曹植棄婦詩〕石榴植前庭。綠葉搖縹青。丹華灼烈烈。帷彩有光榮。……有鳥飛來集。樹翼以悲鳴。悲鳴夫

何爲。丹華實不成。拊心長歎息。無子當歸寧。〔梁元帝詠石榴詩〕西域移根至。南方釀酒來。葉翠如新翦。花紅似故栽。〔溫庭筠海

榴詩〕海榴開似火。先解報春風。葉亂裁殘綠。花宜插髻紅。〔石榴45〕李義山七絕集釋稿(一)〔本學報五一冊〕五七八頁參照。いま

〔3〕の解をとる。

7・8 〔杜牧閑題詩〕男兒所在即爲家。百鎰黃金一朵花。借問春

風何處好。綠楊深巷馬頭斜。

7 〔李白廣陵贈別詩〕繫馬垂楊下。銜杯大道間。〔白居易新樂府井底引銀瓶〕妾弄青梅憑短牆。君騎白馬傍垂楊。

斑駁 〔樂府詩集四七吳聲歌曲・神弦歌明下曲曲二曲之二〕陳

孔驕緒白。陸郎乘斑駁。〔春遊425〕橋峻斑駁疾。川長白鳥高。……庚郎年最少。青草妬春袍。斑駁はやはり貴人の男性の乗馬。

垂楊岸 〔李白採蓮曲〕岸上誰家遊冶郎。三三五五映垂楊。紫騮嘶入落花去。見此踟躕空斷腸。〔又相逢行〕萬戶垂楊裏。君家

阿那邊。

8 「文選二三曹植七哀詩」明月照高樓。流光正徘徊。上有愁思婦。

悲歎有餘哀。……願爲西南風。長逝入君懷。(善曰。古詩曰。從

風入君懷。四坐莫不嘆。翰曰。西南坤地。坤妻道。故願爲此風。

飛入夫懷)〔劉禹錫柳絮詩〕何處好風偏似雪。隋河隄上古江津。

〔白居易立秋夕涼風忽至詩〕嫋嫋簾樹動。好風西南來。〔留贈畏

之三首之三148〕瀟湘浪上有煙景。安得好風吹汝來。

西南〔易坤卦〕西南得朋。東北喪朋。(王弼注 西南。致養

之地。與坤同道者也。故曰得朋)

好風〔玉臺新詠八劉遵繁華應令詩〕腕動飄香麝。衣輕任好風。

〔元稹古豔詞二首之一〕春來頻到宋家東。垂袖開懷待好風。

* *

吳喬

2 言裁扇也。

4 言裁扇枉自千忙。

8 河清難俟之意。

何焯

〔評本〕腹連。以香消花盡作對。

重縫出韻。

3 句向起伏。

徐德泓

二首皆慨不遇而托喻于閨情也。首言製成帷幔之屬以待偶。且扇裁

合歡。羞不自掩。而人卒罔聞之。似雷聲塞耳也。五六句。乃晉問
杳然之意。燈花暗。則無喜信可知。石榴紅。言徒有此美酒之供耳。
結聯。言彼合者常合。而此無得朋之慶也。易曰。西南得朋。似西
南二字。亦非漫下者。

姚培謙

此咏所思之人可思而不可見也。上半首。言守禮謹嚴。鳳尾香羅。
重重深護。月扇遮羞。雷車隔語。深闥麗質。自應如是。下半首。
言慇懃難寄。外不通內。伴金燼之寂寥。內不通外。斷石榴之消息。
斑駁隔岸。漫待好風。眞所謂人遠天涯近矣。

屈復

詳車走句。則一二乃車帷也。三言僅能親面。四言未能交語也。五
六。夜深燈燼。消息難通。七八。言安得好風吹汝來也。

程夢星

星按李青蓮君平既棄世。世亦棄君平二語。可作此二詩注脚。前詩。
言不求人知也。古人云。士爲知己者死。女爲悅己者容。故假借女
子以爲詞。起二句。言己之文藻。譬如女子粧飾之工。三四。言幽
人之貞。猶其戶外不窺。外言不入也。五六。言不爲俗染。猶其深
藏鬢影。未露衣香也。七八。言冶遊蕩子。未嘗無人。然任其繫馬
春風。與我何與也。

紀昀

〔詩說下〕問何以不取無題二首也。曰。說已見前。(六三〇·六
三七頁參照。

馮浩

將赴東川。往別令狐。留宿而有悲歌之作也。首作。起二句。衾帳之具。三句。自慚。四句。令狐乍歸。尚未相見。五六。喻心跡不明而歡會絕望。七八。言將遠行。垂楊岸。寓柳姓。西南。指蜀地。6 孔紹安事。可喻京臣。見同中牡丹585。〔補注〕句意莫定。似寓不得爲京官之慨。玩結聯。言仍然出依幕府耳。

張采田

〔會箋〕首章。起聯。寫留宿時景物。三句。自慚形穢。四句。未暇深談。曾是二句。相思已灰。好音絕望。七八。言將遠行。垂楊岸。寓柳姓。西南。指蜀。

〔辯正〕此爲將赴柳仲郢幕。寓意子直之作。鳳尾二句。記臥室所見。中四句。陳情不省之況。斑駁句。言暫依柳幕。垂楊。暗點柳姓。何處句。言安得西南好風。復吹入君懷耶。

黃侃

義山諸無題。以此二首爲最得風人之旨。察其詞。純託之于守禮不佻之處子。與杜陵（佳人詩）所謂空谷佳人。殆均不媿幽貞。而解者多以爲有思而不得之詞。失之甚矣。

首二句。正寫寂寥時所以自遣。碧文圓頂。謂帳也。車走雷聲。言狂且之言無由入耳也。五句。言幽居情況。日日如斯。六句。言親愛離居。永無消息。七八。言縱有游人窺視。閨中深邃。固非所得而知也。謂之詞婉意嚴。疇云不可。

胡以梅

李義山七律集釋稿（一）

此詩是遇合不諧。皆遇怨之微意。前四句。全用樂府班婕妤怨歌行。

白團扇棄置之謂。但起得變化。不言齊紈。却變爲薄羅。不言白而改爲碧。使人尋繹費力。然詩法具在。第三句。明明承出裁扇。則上二句自是扇之題前矣。首句。贊羅有織鳳。其質甚薄。幾層者是估量之詞。言比厚者薄幾層耳。未必是裁扇用幾層也。碧。碧色。文。亦花樣之謂。如章孝標（少年行）花衫對舞鳳凰文。是也。亦有鳳文羅。此文是原跟上鳳尾來。圓頂。言團扇圓形。縫字。本於丘巨源咏七寶畫團扇詩。裁如白玉璧。縫似明月輪。夜深縫。是言辛苦。第三。方說明團扇。妙在用一魄字。則明是碧羅裁就。所以如月之魄。若白紈裁者。方言明月耳。只此魄字。將上文取得緊緊妙。羞難掩。止言夜作製成。棄置不用。白白辛苦。其羞難掩。：五言寂寞之境。六言消息已無。竟如此。棄婦之石榴。徒有丹華。不能結實。而被出矣。獨用紅字妙。蓋言徒丹而無用也。結用陸郎烏騶。徒繫樹外不歸。那得西南風吹入君懷乎。詳前三句。必有文章干謁。世事周旋。而當塗莫應。四與六七。竟棄之如遺。八。雖此心未歇而亦怨之意。意者謂令狐耶。詩中大抵採集樂府。用其篇中之意居多。須讀樂府原文。則大意盡貫通矣。

近代注釋

〔鈴木〕七三頁。〔高橋〕七一頁。〔劉〕八三頁。〔安徽師大〕一九一頁。〔陳〕七五頁。

1・2 舞い翔ける鳳凰の尾のもように香の匂うあやぎぬはみごと

にうすく、幾重にかさねてもあるかなきかのはかなさ。女のはかなさをあらわすかのような、そのあやぎぬをひろげ、青い天幕の圓天井のもと、夜ふけて縫いものしております。碧文圓頂は姚培謙の説に一應従うはかない。そうすると家屋代用のパオ風大天幕をあやぎぬで作るとする解釋ではいかにもおかしくなる。

3 まんまるいお月さまをかたどった扇でそっと顔を隠してはみますが、打捨てられたわが身の恥ずかしさは隠しおおせるものではありません。とどろく雷鳴のような車の音はいつも表を走りすぎ、おことばかわす機會はいつまでもいつまでもないのです。羞難掩は胡以梅によって解した。主人公は班婕妤式の女性という設定で筋が終始一貫する。

5・6 それこそまったく寂寥そのもの、黄金色のともしびの暗く暗く燃えつきそうなのをみつめるばかり。おたよりとてさっぱりとだえ、石榴の眞紅の花ばかりが目にしみるころになってしまいました。曾是の詩經型の用例、近體詩では未見なのが氣になるが、カツテコレと讀み過去の經驗とする（鈴木・高橋）のでは一連が文脈的にアンバランスになりすぎ、また曾を已と訓じる（安徽師大）のはその根據を知らない。石榴紅も議論の分れるところだが、やはり曹植の棄婦詩を援用する胡以梅に従う。

7・8 いつもお乗りのまだらの駿馬はまたしてもきまってあそこ、例の岸邊の川端やなぎにつないであることでしょう。一體どこでどうしていたら、西南からのすてきな風といっしょにあなたのふ

ところへ飛びこめるのやら。垂楊岸は李白の用例そしてまた章臺柳の故事からも、もちろん色街を指すとしてよい。一應女主人公の獨白としたが、劉のように話し手のことばとすることも可能。いずれにしてもこの詩の場合構造はより單純だと思われ、鈴木が後半四句の主人公をわざわざ男性に變えたのは何故かよく分らない。

例によって、舊注は姚培謙を除きすべて遇合の寄託説。近代諸注は高橋・安徽師大を除き艷情説。なお高橋はこの二首をも連作として扱わない。高橋・安徽師大とも不編年。馮浩は大中六年（八五二）、張采田は大中五年に係年する。

（松田佳子）

無題二首之二 367

重幃深下莫愁堂	重幃深く下す 莫愁の堂
臥後清宵細細長	臥後清宵 細細長し
神女生涯元是夢	神女の生涯 元と是れ夢
4 小姑居處本無郎	小姑の居處 本と郎無し
風波不信菱枝弱	風波は菱枝の弱きに信さず
月露誰教桂葉香	月露誰か桂葉をして香しからしめん
直道相思了無益	直い相 ^た 思 ^ふ 了に益無しと道うも
8 未妨惆悵是清狂	未だ妨げず惆悵 是れ清狂なるを

校

2 清 屈復本「秋」

3 元 朱鶴齡本・全唐詩「原」

5 菱 毛本「菱」

韻

下平十陽（長・香・狂）十一唐（堂・郎）同用

*

1 〔玉臺新詠五何遜閨怨詩〕 合情下翠帳。掩涕閉金屏。〔孟浩然

寒夜詩〕 閨夕綺窗閉。佳人罷縫衣。理琴開寶匣。就枕臥重幃。

重幃 〔應場公諫詩〕 促坐褰重幃。傳滿騰羽觴。〔如有57〕 良

宵一寸豔。回首是重幃。〔文選二三潘岳悼亡詩三首之一〕 幃屏無

髣髴。翰墨有餘跡。〔李善注 廣雅曰。帷。帳也。聲類作幃〕 〔廣

韻幃字注〕 一說單帳也。

莫愁堂 〔玉臺新詠九歌辭二首之二〕 河中之水向東流。洛陽女

兒名莫愁。……十五嫁爲盧家婦。十六生兒字阿侯。盧家蘭室桂爲

梁。中有鬱金蘇合香。〔沈佺期古意呈補闕喬知之詩〕 盧家少婦鬱

金堂。海燕雙棲玳瑁梁。このほか〔越燕二首之一96〕 〔春日103〕

〔對雪二首之二155〕 〔馬嵬二首之二206〕 〔富平少侯211〕 〔追代盧家

人廟堂內221〕 〔代應222〕 にも莫愁がとりあげられ、義山愛用の女

性名の一。なお〔莫愁231〕のみは石城の莫愁（樂府詩集四八西曲

歌莫愁樂）で、ことは別。容齋三筆一一兩莫愁参照。

2 〔古詩十九首之十七〕 愁多知夜長。仰觀衆星列。〔文選二七樂

府古辭傷歌行〕 憂人不能寐。耿耿夜何長。微風吹闌闌。羅帷自飄

李義山七律集釋稿（一）

颺。〔又一九張華情詩二首之一〕 居權榻夜促。在感怨宵長。拊枕

獨嘯歎。感慨心內傷。〔劉孝綽春宵詩〕 春宵猶自長。春心非一傷。

〔夜思568〕 會前猶月在。去後始宵長。

以後 〔鏡檻301〕 散時簾隔露。臥後幕生波。義山以外の用例未

見。

清宵 〔玉臺新詠五柳惲擣衣詩〕 時曙理金翠。容與納清宵。

〔蕭統鍾山講解詩〕 清宵出望園。詰晨屈鍾嶺。〔魚玄機題隱霧亭

詩〕 春花秋月入詩篇。白日清宵是散仙。清夜におなじ。韻律の關

係で字を變えたのであろう。〔清夜怨596〕 含淚坐春宵。聞君欲度

遼。李義山七絕集釋稿（一）（本學報五一冊）五九三頁参照。

細細 〔杜甫嚴鄭公宅同詠竹詩〕 雨洗娟娟淨。風吹細細香。

〔池邊397〕 玉管葭灰細細吹。流鶯上下燕參差。

3 〔文選一九宋玉高唐賦〕 昔者楚襄王與宋玉遊於雲夢之臺。望高

唐之觀。……玉曰。昔者先王嘗遊高唐。怠而晝寢。夢見一婦人曰。

妾巫山之女也。爲高唐之客。聞君遊高唐。願薦枕席。王因幸之。

〔又神女賦〕 楚襄王與宋玉遊於雲夢之浦。使玉賦高唐之事。其夜

王寢。果夢與神女遇。其狀甚麗。王異之。

神女 〔玉臺新詠六徐悱妻劉令嫺答外詩二首之二〕 夜月方神女。

朝霞喻洛妃。〔又七簡文帝美人觀畫詩〕 殿上圖神女。宮裏出佳人。

〔木蘭581〕 瑤姬與神女。長短定何如。

生涯 〔杜甫杜位宅守歲詩〕 誰能更拘束。爛醉是生涯。

4 〔原注〕 古詩有小姑無郎之句。

〔樂府詩集四七吳聲歌曲神弦歌青溪小姑曲〕開門白水。側近橋梁。小姑所居。獨處無郎。〔郭茂倩引吳均續齊諧記 會稽趙文韶。宋元嘉中爲東扶侍。解在青溪中橋。秋夜步月。悵然思歸。乃倚門唱鳥飛曲。忽有青衣。年十五六許。詣門曰。女郎聞歌聲有悅人者。逐月遊戲。故遣相問。文韶都不之疑。遂邀暫過。須臾女郎至。年可十八九許。容色絕妙。謂文韶曰。聞君善歌。能爲作一曲否。文韶卽爲歌草生盤石下。聲甚清美。女郎顧青衣。取箜篌鼓之。冷冷似楚曲。又令侍婢歌繁霜。自脫金簪。扣箜篌和之。婢乃歌曰。歌繁霜。繁霜侵曉幕。何意空相守。坐待繁霜落。留連宴寢。將旦別去。以金簪遺文韶。文韶亦贈以銀盃及瑠璃匕。明日於青溪廟中得之。乃知得所見青溪神女也。又引異苑 青溪小姑。蔣侯第三妹也〕

小姑 これは恐らく普通名詞の方だろうが、〔李賀綠水詞〕東湖採蓮葉。南湖拔蒲根。未持寄小姑。且持感愁魂。

居處 〔論語子路〕樊遲問仁。子曰。居處恭。執事敬。與人忠。雖之夷狄不可棄也。また8句清狂の注に引く漢書の文を参照。

5・6 〔深宮280〕狂飈不惜羅陰薄。清露偏知桂葉濃。

5 風波 〔文選二九李陵與蘇武詩三首之一〕風波一失所。各在天一方。〔馮衍顯志賦〕風波飄其並與合。情惆悵而增傷。普通の風と波に止まらず、義山の場合、特別なイメージの託されている場合があるか。〔鴛鴦276〕不須長結風波願。鎖向金籠始兩全。〔涙320〕永巷長年怨綺羅。離情終日思風波。

不信 〔唐詩紀事二八楊志堅條〕嗜學而貧。妻厭之。一日告離。志堅以詩送之曰。平生志業在琴詩。頭上如今有二絲。漁父尙知谿谷暗。山妻不信出身遲。〔杜甫徐步詩〕把酒從衣濕。吟詩信杖扶。菱枝 この語のともなう氣分表象は〔梁武帝採菱曲〕江南稚女珠腕繩。金翠搖首紅顏興。桂棹容與歌採菱。歌採菱。心未怡。翳羅袖。望所思。をはじめとする一連の樂府による。〔費昶採菱曲〕日斜天欲暮。風生浪未息。宛在水中央。空作兩相憶。〔江洪採菱曲二首之一〕風生綠葉聚。波動紫莖開。含花復含實。正待佳人來。樂府詩集五〇・五一江南弄參照。

6 〔昨夜335〕昨夜西池涼露滿。桂花吹斷月中香。

月露 〔文選二五謝瞻答靈運詩〕開軒滅華燭。月露皓已盈。

桂葉 〔江淹侍始安王石頭詩〕山中如未夕。無使桂葉傷。〔李賀湖中曲〕長眉越沙採蘭若。桂葉水荇春漠漠。

7 直 詩詞曲語辭匯釋卷一に、就使・即使の就・卽に當る假定の辭で饒の字と相似るといい、この一聯は、即使相思無益、亦不妨終抱癡情耳と釋する。

了無益 〔玉臺新詠七梁武帝擬青青河邊草詩〕既寤了無形。與君隔平生。了の字は、助字辨略卷三に、絕也、殊也、と訓じられ、こは否定の強調。

〔韓愈感春三首之三〕少年眞可喜。老大百無益。〔元稹江陵三夢之一〕情知夢無益。非夢見何期。〔雍陶喜夢歸詩〕覺來莫道還無益。未得歸時且當歸。

8 未妨

〔白居易和陽城驛詩〕誰謂謫謫去。未妨遊賞行。

惆悵

〔楚辭九辯〕廓落兮羈旅而無友生。惆悵兮〔王逸注〕後

黨失羣。惘愁毒也。而私自憐。〔文選二八陸機挽歌詩三首之三〕

流離親友思。惆悵神不泰。〔玉臺新詠一秦嘉贈婦詩三首之三〕臨

路懷惆悵。中駕正躑躅。〔詩品下毛伯成〕伯成文不全佳。亦多

惆悵。〔李白代寄情人楚詞體詩〕浮雲深兮不得語。却惆悵而懷憂。

なお惆悵の語を特に愛用するのは杜牧で、詩中に十四例見えるようである。

清狂

〔漢書六三昌邑王賀傳〕〔張〕敞於是條奏賀居處。著其

廢亡之效。曰。……臣敞入視居處狀。……察故王衣服言語跪起。清

狂不惠。〔蘇林曰。凡狂者。陰陽脈盡濁。今此人不狂似狂者。故

言清狂也。或曰。色理清徐而心不慧曰清狂。清狂。如今白痴也〕

〔文選六左思魏都賦〕先生之言未卒。吳蜀二客。……施氣離坐。

懷墨而謝。曰。僕黨清狂。恍迫閭閻。〔劉淵林注引漢書正文并注〕

〔李白陪侍郎叔遊洞庭醉後詩三首之一〕今日竹林宴。我家賢侍

郎。三杯容小阮。醉後發清狂。〔王琦注〕按詩人所稱。多以縱情

詩酒之類爲清狂。與漢書所解殊異。〔杜甫壯遊詩〕放蕩齊趙間。

裘馬頗清狂。春歌叢臺上。冬獵青丘旁。〔又遣興五首之四〕賀公

雅吳語。在位常清狂。〔又遣悶戲呈路十九曹長詩〕惟君最愛清狂

客。百遍相過意未闌。〔仇注〕清狂客三字。曠懷豪興。兼而有之。

公之自命甚高。〔補編七爲滎陽公〔鄭亞〕上宣州裴尚書〔休〕啓〕

近已有狀。不審諸況。比復何如。待詔漢廷。但成老大。留歡湘浦。

暫復清狂。思如昨辰。又已改歲。義山より後になるが、〔韓偓格

卑詩〕南朝峻潔推弘景。東晉清狂數季鷹。これに關連した詩では、

〔羊士諤憶江南舊遊二首之一〕山陰道上桂花滿。王謝風流滿晉書。

〔杜牧潤州二首之一〕大抵南朝皆曠達。可憐東晉最風流。

* *

吳喬

4 此時大悟。

5 通顯不管流落之句。

6 飄恨天之與己美才。詩人大無賴也。傳云恃才詭激。此語見之。

7 道破。

8 聊自解嘲。

何焯

〔評本〕義山無題數詩。不過自傷不逢。無聊怨題。此篇乃直露本意。

5 起伏。

徐德泓

此承上意而言。前四句。言閉幃獨宿。而深悟相思無用矣。然豈終飄泊無依者乎。而孰使之得遂也。故又以風波月露二句轉接。末聯總括。謂明知無益。而到底不能忘情耳。

姚培謙

此義山自言其作詩之旨也。重幃自鎖。清宵自長。所謂神女小姑。即楚詞望美人兮南浦之意。非果有其人也。顧風波浩渺。難斷菱枝

之繁繁。月露蒼茫。寧禁桂葉之飄香。明知其無益而不能自己。世無有心人。吾將誰與訴此也耶。

屈復

原是菱不能真合也。本無郎明知獨處也。菱枝弱。自喻相思之苦。桂葉香。喻所思之遺世獨立也。猶言誰令汝遺世獨立。我安得不相思乎。○夢字承秋宵。居處。承莫愁堂。風波。承白水居處。月露。承神女夢。相思。總結上六句。惆悵。清狂。申說七句也。

程夢星

次首。言人無知己也。起二句。言己之無聞。譬如女子之獨臥深閨。三四。言浮慕虛聲。猶其娉婷不嫁。未成伉儷也。五六。言且加排擠。猶其弱質無依。香魂不返也。七八則正言以總結之。舉世莫容。相思何益。不須惆悵。惟任清狂耳。此即莊子猖狂妄行。乃蹈乎大方之義。未妨字是字口吻。即晉人猶不費我嘯歌語意。

紀昀 六五六頁參照。

馮浩

次章。上半言不寐凝思。惟有寂寥之況。往事難尋。空齋無侶。五謂菱枝本弱。那禁風波屢次。慨今也。六謂桂枝之香。誰從月露折贈。遡舊也。惟其懷此深思。故雖相思無益。終抱癡情耳。此種眞沈淪悲憤一字一淚之篇。乃不解者引入岐途。粗解者未披重霧。可慨久矣。

張采田

〔會箋〕次章。上半狀不寐凝思。惟有寂寥之感。神女句。言從前

顛倒。都若空煙。小姑句。言此後因依。更無門館。五謂菱枝本弱。何堪屢受風波。慨黨局也。六謂桂葉已香。誰遣重添月露。歎文采也。結言亦知相思無益。無如惆悵癡情。終難自己耳。此本馮說。而余爲融釋之。

〔辨正〕重幃二句。寫夜臥展轉不眠情態。神女句。言當日婚於王氏。遂致令狐之怒。今已悼亡。思之渾如一夢耳。小姑句。言己雖暫依李黨。不過聊謀祿仕。并非爲所深知。如小姑居處。久已無郎。奈何子直。藉此爲口實哉。風波句。言黨局嫌猜。爲所遷累。月露句。言子直無端貴顯。結則言雖知陳情無益。而無如惆悵何也。通篇反覆自傷。不作一決絕語。眞一字一淚之詩矣。

黃侃

次首。首二句。極寫其岑寂。三句。言縱復懷人。祇勞夢想。四句。言獨居幽地。不厭單棲。五句。言狂暴相凌。徒困荏弱。六句。言容華姣好。易召侵欺。七八。言終不棄禮而相從。雖見懷思。適成癡俗也。

胡以梅

此以莫愁比所思之人也。言莫愁重幃深處。予臥清宵甚長。妙在不言細細思而言細細長。則細細之中已有思。若說出思字。則細細二字。化爲俗物耳。所以妙。第三。必先有一番妄想。今成如神女之夢。第四。本非匹偶。所以不能爲之郎也。五六。菱字。用樂府採菱曲之菱。信。任也。如春風自信牙橋動之信。言風波不任菱枝之弱。而加之以飄蕩。以致菱不能採。而月露明。有桂可折。誰教天

香可愛。令人不能捨乎。風波。必當時時事。結言已絕望。付之惆悵清狂已爾。

近代注釋

〔鈴木七三頁〕〔高橋〕五〇頁。〔劉〕八五頁。〔安徽師大〕一九二頁。〔陳〕七六頁。

* * *

舊説は艶情、自傷の二つに集約される。それとても「慨不遇而托喻于閨情也」という徐德泓に明きらかなように、これら二説は排他的でなく相補的であり、比重のかけかたのちがいにによって分けられるにすぎない程度のものであって、總體的な解釋の對立とみなす必要はない。

1・2 深く下ろされたいく重ものとはりによって外界と隔てられ、固く閉ざされた部屋の中、いつまでも眠られぬひとり寝の切ない夜——このすてきな夜なのに——の時間が靜かに流れて行く。細長とは、ほのかにゆらめくような時間がゆっくりと流れて行く、というふうなことか。時間の流れを感覺的にとらえることによつて臥す人の息苦しい思いをもちこたえていくさまを暗示している。

3・4 男の夢の中でしか男と交われず、この世で男と添われることのない巫山の神女——恰かもそれがわたしである。この世で決して遂げられることのない思い、夢の中にしか住みつくことのできない思いに執し、耐えていかなければならないわたしの生涯は神女の生涯である。青溪の小姑は獨り身の日常で、がんらい一人

の男も持たなかった——のおなじく、ほんとうに思う男とは添われないのがもとよりのわたしの定めだ。居處は場所ではなく居止動靜、居常。

5・6 だが、わたしは耐えていけるだろうか。荒々しい風波は池中の菱のか弱い芳枝を容赦なくもてあそび傷つけずにはすましてくれぬ。月のしづくを浴びて香る桂樹のあの芳香を、濃まやかに、いっぱい放つまで凋れずにおれるだろうか。この兩句は難解で、絶望、期待、兩様にとれるが、風波は好ましからざる男性、月露こそそのぞみの男としておく。誰教は助字句ゆえ對になる不信の信も助字的に讀む。

7・8 誰が何といつても命のかぎり、わたしはこの、遂げられることのない思いに執し耐えて行く。身も世もあらず恨み悲しみながらこの思いに執しつづけるわたしの生き方こそ「清狂」——世俗のきまりもおもわくも顧慮しないさつそうたる自由放蕩の精神そのものといつていえなくはないのだから。清狂の語、多くは漢書の原義によつて釋されるが、いま程夢星および高橋に従う。その方が7・8兩句の屈折および8句の構造「未妨——是——」を忠實に譯することになる。他の諸注釋では「是」を事實上無視している。程のいう猖狂は莊子在宥・山木篇に、晉人云々は晉書四九謝鯤傳に見える。

痛切な悲調とでもいうべき、この詩の主調音を見出すことはさほど困難ではないが、女主人公の性格には貴女から妓女までの巾

がありうるし、以上のように女性の獨白として通すほかに、女を思う男のことばとすることも可能である。さらに1句から6句までを客觀描寫とし、7・8句において隠れていた話し手(第三者)の肉聲がひびく、といった構造を考えることもできよう。

(茂木信之)

無題 570

萬里風波一葉舟 萬里の風波 一葉の舟

憶歸初罷更夷猶 歸るを憶い初めて罷むも 更に夷猶

碧江地沒元相引 碧江地沒 元と相引き

4 黃鶴沙邊亦少留 黃鶴沙邊 亦た少しく留る

益德冤魂終報主 益德の冤魂 終に主に報い

阿童高義鎮橫秋 阿童の高義 鎮に秋に横う

人生豈得長無謂 人生豈長に謂れ無きを得んや

8 懷古思鄉共白頭 古を懷い鄉を思ひ 共に白頭

校

1 里 高麗本・唐詩鼓吹七「事」

8 鄉 統鑑校注「一作賢」

韻

下平十八尤(舟・猶・留・秋)十九侯(頭)同用

*

1・2 「楚辭九章哀郢」順風波以從流兮。焉洋洋而爲客。(王逸

注 洋洋。無所歸貌也)……將運舟而下浮兮。上洞庭而下江。去終古之所居兮。今逍遙而來東。羌靈魂之欲歸兮。何須臾而忘反。

1 萬里風波 「沈約從軍行」雪繁九折嶺。風卷萬里波。「宋書七
六宗愨傳」愨曰。願乘長風破萬里浪。「文選二五謝惠連西陵遇風
獻康樂詩」臨津不得濟。佇楫阻風波。(李注 家語曰。不觀巨海。
何以知風波之患也)「劉長卿湘中憶歸詩」迢遞萬里帆。飄飄一行
客。獨憐西江外。遠寄風波裏。「春日寄懷」欲逐風波千萬里。
未知何日到龍津。

一葉舟 「白居易泛春池詩」波上一葉舟。舟中一樽酒。「荆門
西下」一夕南風一葉危。荆雲迴望夏雲時。

2 憶歸 「白居易東南行一百韻」憶歸恒慘愴。懷舊忽踟躕。「劉
阜旅次朔方詩」客舍并州數十霜。歸心日夜憶咸陽。(御覽詩)憶
是記憶の憶、いつも心から離れない。

夷猶 「楚辭九章抽思」悲夷猶而冀進兮。(王逸注 意懷猶豫。
幸擢拔也)心怛傷之慘愴。「又亂」低徊夷猶。宿北姑兮。「文選二
〇謝朓新亭渚別范零陵詩」停驂我悵望。輟棹子夷猶。

3 碧江地沒 長江の流れが大地に沒して行く景をいったものか。
やや似通った句として、「白居易東南行一百韻」地遠窮江界。天
低極海隅。地沒は用例未見。「張祜夢江南詩」盡日碧江夢。江南
紅樹春。

相引 「杜甫陪李金吾花下飲詩」勝地初相引。余行得自娛。
(仇注 始則陪李同行。故曰相引)「又喜達行在所三首之一」霧

樹行相引。蓮峰望忽開。

4 黃鶴 (1)〔述異記〕荀環字叔偉。……嘗東游。憩江夏黃鶴樓上。

望西南有物。飄然降自霄漢。俄頃已至。乃駕鶴之賓也。……已而辭去。跨鶴騰空。眇然煙滅。〔庾信哀江南賦〕落帆黃鶴之浦。藏船鸚鵡之洲。〔元和郡縣圖志〕七鄂州。城西臨大江。西南角因磯爲樓。名黃鶴樓。また閻伯里黃鶴樓記〔文苑英華八一〇〕参照。

(2)〔虞羲自君之出矣詩〕君出無消息。惟見黃鶴飛。〔杜甫王閬州筵奉酬十一舅惜別之作〕沙頭暮黃鶴。失侶亦哀號。〔又秋興八首之六〕珠簾繡柱圍黃鶴。錦纜牙樯起白鷗。〔九家注〕舊注引黃鶴樓在漢陽郡。非是。

沙邊 〔杜甫歸雁詩二首之一〕雲裏相呼疾。沙邊自宿稀。

少留 〔離騷〕欲少留此靈瑣兮。日忽忽其將暮。〔文選九班彪北征賦〕舊室滅以丘墟兮。曾不得乎少留。

5 〔蜀志六張飛傳〕張飛字益德。涿郡人也。少與關羽俱事先主。

……先主伐吳。飛當率兵萬人。自閬中會江州。臨發。其帳下將張達范疆殺飛。持其首。順流而奔孫權。飛營都督表報先主。先主聞飛都督之有表也。曰。噫。飛死矣。〔楊戲季漢輔臣贊〕關張赴赴。出身匡世。……悼惟輕慮。隕身匡國。〔籌筆驛101〕管樂有才真不忝。關張無命欲何如。

冤魂 〔後漢書列傳六四下袁譚傳〕〔審〕配獻書於譚曰。……

至令將軍忘孝友之仁。襲闕沈之迹。放兵鈔突。屠城殺吏。冤魂痛於幽冥。創痍被於草棘。〔文選五七潘岳馬汧督誅〕死而有靈。庶

慰冤魂。〔杜甫去秋行〕戰場冤魂每夜哭。空令野營猛士悲。〔哭劉司戶二首之二23〕已爲秦逐客。復作楚冤魂。

報主 〔文選三七曹植求自試表〕臣之事君。必以殺身靜亂。以功報主也。

6 〔晉書四二王濬傳〕除巴郡太守。郡邊吳境。兵士苦役。生男多

不養。濬乃嚴其科條。寬其徭課。其產育者皆與休復。所全活者數千人。……武帝謀伐吳。詔濬修舟艦。〔太康元年二月〕壬寅。濬入于石頭。〔孫皓〕乃備亡國之禮。……造于壘門。……王渾久破皓中軍。斬張悌等。頓兵不進。而濬乘勝納降。渾恥而且忿。乃表濬違詔不受節度。誣罪狀之。有司遂按濬檣車徵。帝弗許。詔讓濬曰。伐國事重。宜令有一。……云何徑前。不從渾命。違制昧利。甚失大義。……濬上書自理曰。……案春秋之義。大夫出疆。由有專輒。臣雖愚蠹。以爲事君之道。唯當竭節盡忠。奮不顧身。量力受任。臨事制宜。苟利社稷。死生以之。……濬有二孫。過江。不見齒錄。安西將軍桓溫鎮江陵。表言之曰。……案故撫軍王濬。歷職內外。任兼文武。料敵制勝。明勇獨斷。義存社稷之利。不顧專輒之罪。荷戈長驚。席卷萬里。僭號之吳。面縛象魏。濬の上書。桓溫の上表、ともに義の字あり。〔晉書三〇羊祜傳〕又時吳有童謠曰。阿童復阿童。銜刀浮渡海。不畏岸上獸。但畏水中龍。……會益州刺史王濬徵爲大司農。祜知其可任。濬又小字阿童。因表留濬監益州諸軍事。加龍驤將軍。密令修舟艦。爲順流之計。〔又二八五行志〕孫皓天紀中。童謠曰。阿童復阿童。……武帝聞之。加

王濬龍驤將軍。及征吳。江西衆軍無過者。而王濬先定秣陵。〔陸龜蒙小名錄〕王濬。字士治。弘農人也。小字阿童。〔李賀王濬墓下作〕人間無阿童。猶唱水中龍。

高義

〔文選五〇沈約宋書謝靈運傳論〕屈平宋玉。導清源於前。賈誼相如。振芳塵於後。英辭潤金石。高義薄雲天。〔五言述德抒情詩564〕有客趨高義。於今滯下卿。

橫秋

〔文選四三孔稚珪北山移文〕風情張日。霜氣橫秋。

7・8 〔七月二十九日崇讓宅譙作327〕豈到白頭長只爾。嵩陽松雪有心期。

7 人生豈得

無謂

〔荆門西下78〕人生豈得輕離別。天意何曾忌嶮巇。無謂〔漢書一下高帝紀〕諸侯子及從軍歸者。甚多高爵。……爵或人君。上所尊禮。久立吏前。曾不爲決。甚亡謂也〔師古曰。亡謂者。失於事宜。不可以訓〕

8 懷古

〔文選三張衡東京賦〕望先帝之舊墟。慨長思而懷古。

思鄉

〔文選二九曹丕雜詩二首之一〕鬱鬱多悲思。緜緜思故鄉。〔柳宗元南霽雲睢陽廟碑〕洛陽城下。思鄉之夢儻來。麒麟閣中。卽圖之詞可繼。

卽圖之詞可繼。

* *

朱鶴齡

按詩中益德阿童。皆用巴閬事。恐是東川時作。

吳喬

此詩在外集。長孺說信也。或義山別有悶事。亦名爲無題耶。而無

題之非艷詩。卽此阿童益德可據。冤魂報主。唐時稗史。必有其說。故爾用之。張王皆是東川事。故曰懷古而豈得長無謂。思有所建立也。

朱彝尊

語淡意深。

何焯

〔讀書記〕此篇未詳。〔評本〕「此篇」なし

陸鳴皋

此在蜀之詩。前半思歸而憶其道路。五六句。卽引蜀事。言人死生俱當有所作爲。故第七句緊接。而末句總結前文。沉鬱之思。直逼老杜。

姚培謙

此言思歸不得之恨也。必在東川幕中作。萬里風波。豈能傳翼飛去。憶歸之心。愈欲撇開。愈加縈繫。觀碧江之東下。既有相引之情。羨黃鶴之自由。亦若有留待之意。所謂夷猶也。因思丈夫在世。亦貴自行其志耳。益德阿童。皆巴閬中事。冤魂報主。至死不迴也。高義橫秋。一往莫禦也。今我於思鄉之際。發此懷古之情。似屬無謂。不知人生駒隙。白首如期。豈能長在世間。而乃受人牽制如此耶。

程夢星

此篇第二句憶歸初罷。第八句懷古思鄉。是作者之意旨。所懷之古。爲益德。爲阿童。皆巴中事。則所謂初罷者。乃大中年間。梓州府罷。將歸鄭州之時也。一生幕職。老大無成。又復歸來。思之無謂。

故不禁其感憤成詩。起句。言萬里之遙。風波之險。去來漂泊之情況。惟有一舟而已。次句。言憶歸固客子之心。初罷亦無聊之至。夷猶中路。未免去住兩難。三四。承上夷猶。言江流既牽引其歸心。沙畔復逗留其離緒。五六。逗下懷古。從今日過客之無成。思往昔蜀中之豪傑。七八。則總括通首。而暢明其作詩之懷抱也。此詩後半。與曾共山翁把酒卮一首（九日103）後半同一作法。彼逆揭郎君。突寫二語。然後結出郎君。此逆揭懷古。突寫二語。然後結出懷古。律體中陡健之格。其法自杜子美出也。

3 沒。疑作脉。

紀昀

〔詩說上〕此是佚去原題。而編錄者題以無題。非他寓言之類。〔評本「原」を「本」に、「題以」を「署曰」に、「類」を「比」に作る〕○前四句。低徊徐引。五六。斗然振起。七八。曼聲作結。絕好筆意。〔評本「斗然」なく、「曼聲作結」を「以曼聲收之」に作る〕○廉衣（李中簡）曰。次句。缺渾成。（評本この條なし）〔評本〕全篇從更夷猶三字生出。○懷古思鄉。收繳第二句完密。○地沒二字。不可解。午橋曰當作地脈。亦一說。

馮浩

似因破帆荆江（偶成轉韻562第三八句）。驚魂方定。故曰萬里風波。不得已而又就扁舟。故曰憶歸初罷更夷猶也。三句。謂沿江之境相連。四句。小駐櫓於武昌也。曰亦少留者。似追憶會昌初鄂岳之役。今又小留於此也。一結極淒惋。惜五六無可曉耳。舊解泥作東川。

絕不通矣。

3 沒字當誤。或疑作脈。未可定。

5 冤魂報主事未詳。

6 事亦未詳。舊注引濬守巴郡。禁巴人不得棄子事。絕無當也。益德被害。事在閬州。士治則久在益州。義山茲行。似爲益州。他詩

（望喜驛別嘉陵江水二絕之一208）又云。望喜樓中憶閬州。自注。此情別寄。則固當有意在。或借古人。以寓其姓。非用古事也。徒詮其粗迹。則一死一生。皆有功義。引起長無謂之慨。

張采田

〔會箋〕此爲李回發。說已詳譜矣。回自西川左遷。故曰碧江地沒元相引。地沒。謂貶官。或作地脈。謂己與回本係一黨。亦通。益德報主。喻衛公。衛公乃心武宗。竟至投荒。是死報主知矣。阿重。比李回始終贊皇。被謫左遷。高義固無忝士治也。五六。懷古。憶歸初罷。是思鄉。結言人生無謂。安能如此終古哉。義山後此。轉向牛黨。屢啓陳情。皆以此篇轉關。此實集中一字一淚篇矣。讀者不可忽視也。（年譜）大中二年。惟是巴蜀遊蹤。水陸僕僕。似乎心注成都。而留滯荊州。……時鄭亞初貶。李回方左遷湖南。義山窮途無依。固不能不望其援手也。……無題一章。尤爲此段行蹤之關鍵。起曰萬里風波一葉舟。憶歸初罷更夷猶。言桂州府罷。尚有所待也。曰碧江地沒原相引。言李回本同黨。雖由西川左遷。未嘗不可援引也。曰黃鶴沙邊亦少留。言己與李回。相遇荊州。爲之少留也。中聯。引益德阿重二典。雖無可徵實。然亦益德報主。比

衛公之乃心武宗。以王濬受厄王渾。功高得謗。比李回因黨禍而貶官。不負衛公之知。詞意均極明顯。結則言李回既不能攜赴湖南。進既不可。歸又不能。人生如此。徒使我懷古思鄉。安能忍而與之終古乎。此所以留滯荆門之後。又有巴蜀之遊也。

〔辨正〕此玉谿桂州府罷。留滯荆江。感念遇合之作。義山於大中二年鄭亞貶後。即屬望李回湖南幕府。以鄭亞李回皆李黨也。首二句。言桂州罷歸。更有所圖。碧江句。言我之赴蜀。原望李回援引。回爲府主。並非冒昧。黃鶴句。言無如其畏譏疎我。致使小滯於荆門。益德二句。則言古人受恩圖報者甚多。如益德之冤魂。猶思報主。阿童之高義。尙且橫秋。我非不欲盡忠於故主。而朝局反復。李黨疊敗。並一窮交而不能護庇。人生如此無謂。安能常此終古乎。此所謂懷古思鄉共白頭也。懷古即指益德二事。義山初心依恃贊皇。於此可見。其後向令狐屢啓陳情。皆其不得已之苦心也。此篇爲玉谿一生出處關鍵。晦其旨。故以無題命篇。

益德阿童。皆用巴閬故事。此二句。亦兼閬中遇合無成而言。詩具兩意。一則慨己之不能始終報恩故主。一則假古人之高義。哀憐舊交。以見今人不然也。閬中不知屬望何人。疑其人亦李黨歟。

廖文炳

此詩不甚可解。細玩之。前四句。是思鄉。五六。乃懷古也。首言萬事如風波中之一葉。思歸未得。則尤如一葉之漂泊無依耳。碧江句。未詳。亦少留者。或即其所謂夷猶也。益德阿童。一成一敗。總屬風波。此亦萬事中之一二事。而我爲留滯所觸。懷此二人。所

以并思鄉而鬢白如絲耳。（本稿各篇の廖文炳解は、何れも王清臣らの改作だが、續稿には廖の原文を載せる）

近代注釋

〔森〕下卷二三六頁。

* * *

1・2 萬里のかなたから吹きよせてくる風と波、それにもてあそばれる一枚の木の葉のような小舟——私をのせたこのちっぽけな舟は、あたかもよるべなき我が身さながら、たよりなく、不安な、翻弄の中にある。故郷に歸りたいとそればかりを心に念じて、意にそわぬ遠地での職を辭したところであるのに、どうしたことか、この時になって今更のように、ためらい、行きまどうとは。高麗本と『唐詩鼓吹』に従って「萬事」とすると、「萬事は風波の一葉舟」、冒頭から觀念的な比喩性が濃厚になり、且つ「萬里風波」と「一葉舟」とのコントラストが消える。ここでは現に身を置いているのが水上の舟であることを述べつつ、自己の身世の比喩をも重ねた底本がよい。「中路因循我所長」（有感²³⁴）の句が端的に語るように、ためらい、迷いがちな心象の表白は、義山の心情表現の顯著な特徴の一つである。

3・4 みどりの水をたたえた長江は、大地の陥没に向かってひたすら流れ、その上に浮かぶ私の船は本來の定めのようにひきよせられる。その途中で目に觸れたのは、みぎわにたわむれる色鮮やかな水鳥たち、彼らののびやかな姿もしばし私の足をひきと

める。「地没」に舊注も苦しむ。程夢星は「地脈」かと疑う。馮浩はそれも「未可定」。紀昀は「亦一説」。ここでは、「沙邊」の輕さと均衡を失するけれども、「地没」のまま、強いて解を求めた。「黃鶴」も、地名と解する説（馮浩）と、水邊の鳥と解する説（程夢星・姚培謙）に分かれている。地名とするにしても、黃鶴そのものの形象を捨てることはできない。鳥であるにしても、これに近い措辭を用いる杜甫「沙頭暮黃鶴、失侶亦哀號」と同様に、象徵性を帯びた鳥である。姚培謙が「羨黃鶴之自由」と釋するように、自由なあり方の象徵とすると、この對句から、大河の流れのように抗いがたく我が身を押し流す大きな力と、その人生に作用する力から自由な、とらわれない生き方との、對比の構圖が生まれる。

5・6 この長江のほとりで、無念にも首をかきとられた張飛は、靈魂となつてついに主の恩に報いたのであった。また長江を下つて吳を討つた王濬の氣高い正義は、冷たく澄みきつた秋の太空中に、凜として永遠に存在しつづけている。張飛は配下の將に裏切られて業半ばにして死んだので（『三國志』卷三十六、『三國演義』第八十一回）、「冤魂」という。後の關漢卿に「關張雙赴西蜀夢」劇がある。『三國演義』の濫觴が唐代に已にあったとして資料にされるのは、「或譜張飛胡」（驕兒詩565）の一句だが、吳喬がいうように「唐時神史必有其說」かもしれない。冤魂が死を主に報知した意味では、やはりないであろう。「阿童……」の童謡が

きつかけとなつて拔擢された王濬は、益州を發つて江を下り、吳の平定に成功した。『晉書』本傳には、王濬の功をねたんだ王渾の謗議に對する、濬の辯明が見え、張采田は年譜正文で、その事を指すとするが、或いはやはり別の故事に基くか。兩句、單に土地にまつる武將の英雄譚を敘述したものではなく、諸家諸説を提出するように、義山の身邊の人間——おそらくは已にこの世になつた精神の高貴さに對して、不如意で中途半端な自分自身へと思ひは返る。

7・8 人生永久にわりなき思い抱いたまま——などというところが、あつてよいものか。しかし、遠い古えの人々の事跡を思い浮かべて心を傷め、また遙かなたの故郷に思いを致して胸をつまらせる——その雙方で私の髪は白くなるばかりだ。「懷古」「思郷」という時間と空間を隔てる二つの思いが、「白頭」をもたらし起因となるように解したが、あるいは因果關係に結びつけず、「懷古」「思郷」の思いを抱きながら、その思いと共に老いていくばかり、と讀めるかもしれない。「無謂」も、張飛・王濬の武名がいまだにたたえられているのに對して、「人の口にのぼらない」「無名のまま」の意味をもつ可能性がある。

本作品の係年は、(A)劍南東川の柳仲郢幕下の時期とする程夢星および安徽師大（大中九年八五五）、(B)桂管の鄭亞の幕を罷めて荆に在った時期とする馮浩・張采田（大中二年八四八）と説が分

かれる。この係年を中心として、近人の間でかつて論争があり、未見の文章もあるが、論旨を簡単に記す。

(1) 陳寅恪 張采田〔會箋〕を駁す。大中三年の李德裕の死後、同六年に江陵で李燁なる人物に遭遇しての作で、「憶歸初罷」の主體は燁、「益德」は德裕を、「阿童」は柳仲郢を指す。(史語所集刊五本二分「李德裕貶死年月及歸葬傳說辨證」)

(2) 張采田 陳氏に反駁。義山は燁はもちろん、德裕とさえ面識なし。(中山大學文科研究院語言文學專刊一卷一期「與吳雨生論陳寅恪李德裕歸葬辨證書」——未見)

(3) 溫廷敬 大中十一年、東川の幕を罷め、武昌を経て鄭州へ歸郷途上の作。(語言文學專刊一卷二期「李義山萬里風波詩解」——未見)

(4) 張采田 溫氏に反駁。當時家族は長安に在り、長安への途次武昌を経るは迂。(史學年報二卷四期「與李滄萍及門書」)

(5) 湯翼海 陳氏を支持。「地沒」は燁に關係、「相引」は燁と義山の江陵での遭遇、「懷古」するは義山、「思郷」するは燁。(民主評論一四卷九期「李義山無題詩考釋」)

《餘論——無題・艷詩・借題》

一連の無題詩群の中で、この一首は性質を異にする。他が艷詩としては一括できるのに對して、この詩には艷情を認めがたいのである。では、まず、無題詩とは何か。そこに何らかの共通する性質はあるのか。

義山以前の唐詩に「無題」と題する作品を求めると、わずかに盧綸・張籍・李德裕に各一首がある。盧綸のそれは第七句が缺け、張籍のそれは、劉禹錫の作が誤って張籍の集に入つたものらしい『樂府詩集』卷八二に劉禹錫「踏歌行」として、また『劉賓客文集』卷二六に「踏歌詞」として收められている。内容の點でも共通性はなく、これら散見する「無題」詩は、「失題」・「闕題」と同じく、收録の際に本來の詩題が已に失われていたものと考えられる。

またまつた數の無題詩が残されるのは、義山に始まる。舊本によれば、七律七首のほか、五律三首116 120 125 七絶三首73 111 139 五古124 七古117 五言小律90 (統籤・姚培謙の部立てによる。四部叢刊・屈復は五古に入れる) 各一首の、計十六首が數えられる。

唐末宋初では、張喬に一首(校注「一作贈友人」、艷詩ではなく、これも「失題」の類)、唐彥謙に十首、王周に二首、韓偓と吳融の唱和詩各四首(韓偓のそのの序によれば、さらに王溥・令狐渙・劉崇譽・王渙の唱和詩も數首あったはず)、吳融には別に一首があり、『西昆酬唱集』には十五首が收められている。唐彥謙以下、數量のまとまりからみても偶然ではなく、措辭の上でも義山を繼承しているのは明らかである。そしてそれらは、艷詩として内容の點でも共通している。

清朝初めまでは、無題詩を艷詩とみなすのが、普通の考え方であつたようだ。「義山無題諸作、世多以艷語目之」(程夢星) そう

した一般的な見方を引いた上でそれに對して程夢星は寄託と主張する。「不知義山艷語、轉皆有題、凡無題者、皆寄託也」また馮浩は、純粹な艷詩は少なく寄託が多いと、二つに分けて考えている。「自來解無題諸詩者、或謂其皆屬寓言、或謂其盡賦本事、各有偏見、互持莫決、余細讀全集、乃知實有寄託者多、直作艷情者少、夾雜不分、令人迷亂耳」ここで問題になっているのは、寄託があるかないかであり、詩が第一義的には艷情の作であることは、自明とみなされているかにみえる。

こうして、義山の作品に寄託をよみとるのは、清朝の注釋家に顯著になるもので、本來は純粹な艷詩としてうけいれられていたようである。義山自身のことばに「至於南國妖姬、藁臺妙妓、雖有涉於篇什、實不接於風流」(文集卷四「上河東公啓」)悼亡の後、柳仲郢が歌妓を義山に贈ろうとしたのに對する謝絶であるが、自己の作品が實生活と無關係に製作されることを述べるだけで、そこに寄託の意がこめられているという主張はされていない。唐末の李涪も、義山の詩が美に偏して道が缺如していることを非難する。「李商隱爲文、……近世尙綺靡、鄙稽古、商隱詞藻奇麗、爲一時之最、所著尺牘篇詠、少年師之如不及、無一言經國、無纖意獎善、惟逞章句、因以知夫爲錦者、纖巧萬狀、光輝曜日、首出百工、惟是一端、得其性也、至於君臣長幼之義、舉四隅莫反其一也、彼商隱者、乃一錦工耳、豈妨其愚也哉」(『刊誤』卷下釋怪條)義山を模倣する韓偓や西崑派の諸作も、純粹な艷詩としてのみ讀ま

れていたもので、そのためにしばしば内容空疎だとして批判を被っている。北宋時代、『香奩集』を和凝の作とする説が生まれたのも、そもそもは和凝にとつて艷詩を自作と稱するのが不都合であったと考えることから發したもので、『香奩集』が純粹な艷詩として見られていたことを示している。それを忠君の意の寄託として再解釋を施すのは、清末の震鈞に至つてのことである。

無題という詩題命名法が義山によつて創始され、そこに艷詩という一貫した性質がもしあるとするならば、當面の萬里風波の一首は、いかに位置づけられるのか。

最も明快な解釋を下すのは、紀昀であつて、彼はこの「無題」詩のみは本來の題の失なわれた「失題」と同様の作品と決めることによつて不整合を解消している。ただし今日見られるテクストにこの詩を「失題」とするものではなく、『唐詩鼓吹』および高麗本では無題詩群の冒頭にこの一首がおかれているが。

紀昀とは裏腹に、判斷を停止しているのは、何焯。「此篇未詳」とのみ記すのは、詩の内容が理解しがたいというより、内容と詩題との齟齬のためであらう。

第三の解釋は、義山の胸中に公けにしがたい思いがあり、そのために眞意を韜晦して「無題」と題したとするもので、吳喬、張采田がそれに屬する。その場合、本意が隠されていることが強調され、艷詩であるか否かについては、全く留意されてないようだ。馮浩が「幽人不倦賞」を「失題」と改題しながら、この「萬里

風波」については放置していることも、前者は單なる贈答詩と解し、特別に秘められた感慨をこめてはいないと認めたためであるうか。當面の一首の受けとめ方は、無題詩の本質規定に關する問題であり、俄かに結論を出したいが、さしあたり紀昀の説に従っておこう。無題諸作中この一首のみ集外詩でもあるのだ。

無題詩が、隱匿されねばならぬ極めて個人的な心情をこめたものとする吳・張の説を裏返せば昨夜星辰の連作こそ典型的な無題詩だといつてゐる事になる。そこには、中國の艷詩一般とは異なり戀愛感情という極めて個人的な抒情が流れているからである。それが詩人の體驗であるか、假構されたものであるかはおくとしても、特定の個人だけにかかわる場が設定されていることは確かである。それらを假に「原・無題詩」とよぶとすると、無題詩の中にも、ことに七律以外の作品に、たとえば「近知名阿侯90」・「八歲偷照鏡124」の如く、樂府の流れを汲むものがあつて、それは個別的な經驗から生まれた抒情とは認められない。五律「照梁初有情120」なども、冶遊の艷詩とみなすべきであつて、秘められた思いを含ませたものではない。その尾聯「莫近彈棋局、中心最不平」にみられるような諧謔は、集團の場を必要とするもので、特定の男女二人の孤立した世界の中では生じないからである。そうなるが無題詩を艷詩として一括したとしても、實は均質ではなく、原・無題詩と想定される類いの作は、むしろ極めて一部に限られてしまう。

一方、無題詩以外の詩——詩中の、多くは冒頭の、二字をとつて題とする借題の詩の中に、原・無題詩に類似するものが少なくない。明初の宋公傳の『元詩體要』には、「無題詩體」という内容上のジャンルが、「香奩體」・「詠物體」との範列關係の中で立てられている。「無題之詩、起於唐李商隱、多言閨情及宮事、故隱諱不名、而曰無題」(卷九「無題詩體」小序)ここに至るまでに、『滄浪詩話』にも「李商隱體」として彼のスタイルが立てられているが、それを無題詩に限定する記述はない。義山を直接に繼承する『香奩集』・『西崑酬唱集』には、無題の數よりも多く、借題の艷詩が收められている。したがつて、無題詩の性質は、借題詩をも含めた上で、考えられるべきであらう。ただし、借題の中には、全く任意に詩中の字を借りて題にしたとしか思われないものと、題に選ばれた語が詩の中でより大きな意味をもつと思われるもの(詠物詩に近づくもの)とがある。また借題とは別に、詩の形式を示すだけで詩の内容に觸れない詩題をもつ詩(たとえば「當句有對390」など)もある。

詩の内容の指示を拒絶するという點で、無題も借題も同様であるかにみえるが、題のもっている情報量の點では相違があるように思われる。無題詩がいくつかわ作られると、「無題」という標示によつて、そこに一つの意味作用が生じてしまうからである。詩題の透明性においては、冒頭の二字を無雜作に題にした方がまさるであらう。

もう一つ推測されることは、無題詩群と借題詩群との、製作時期のずれである。詩の中に「本事」を読みこむ馮浩・張采田の編年では、無題詩が義山の全生涯にわたって作られたことにされているが、外的事象の指示を遮断する際に、「無題」と題するか詩中の字を借りるかで、それぞれ或る程度まとまって製作された時期があり、二つの年代に差異があると想定できないだろうか。

(川合康三)

附録甲 七絶集釋稿 (二) 補訂

(a) 翦燭 補注〔白居易楊柳枝二十韻〕粧成翦燭後。醉起拂衫時。

(五七七頁上)

(b) 枯荷 補注〔白居易衰荷詩〕無人解愛蕭條境。更繞衰藜一匝看。

(五八六頁下)

(c) 十萬家 補注〔漢書三八高五王傳〕(主父) 偃幸用事。因言齊

臨淄十萬戶。市租千金。人衆殷富。鉅於長安。(六〇四頁下)

(d) 枉是 訓讀ではむしろ「枉げて是れ(蛟龍の解く舟を覆す)」
とよむべきか。(六〇八頁下)

附録乙 各本篇目對照表校補・續

四八九頁49憶梅・姚培謙6. ↓13.

56石城・馮浩37a ↓39a

李義山七律集釋稿(一)

四九一頁90無題・張采田左203 ↓204

四九四頁162壬申閏秋・馮浩16b ↓14b

四九六頁206馬嵬・總集「品88」補入

211 富平少侯・總集「品88」補入

四九七頁230東下三句・馮浩3. ↓4.

240 瑤池・馮浩47b ↓47a

四九八頁253及第東歸・馮浩30a ↓30b

四九九頁260曲水閑話・高麗本「7.11a」抹消

271 重有感・馮浩15b ↓18a

五〇〇頁295「定安」城樓 ↓「安定」城樓

五〇一頁323出關・高麗本「7.11a」補入

五〇九頁503九日・張采田左152 ↓151

五一三頁579朱槿花・錢寫本39b ↓44b

〃 毛本29b ↓33a

〃 朱鶴齡64b ↓72b

〃 張采田右「515」補入

580 寓懷・馮浩26b ↓26a

590 晉昌晚歸・錢寫本44b ↓39b

〃 毛本33a ↓29b

〃 朱鶴齡72b ↓64b

〃 張采田右「515」抹消

598 木蘭花・馮浩「3.38a」補入

六七